都市計画道豊里・久居線道路改良事業に伴う

峯治城跡発掘調査報告

－津市一身田町－

1991・3

三重県埋蔵文化財センター

序

西に鈴鹿の山なみ、東に伊勢の海を望む伊勢平野の各丘陵上には伊勢新聞社が出版した「伊勢の国盗りの物語」の舞台となった、有名な城跡や無名の城跡が多数所在しています。

今はそのほとんどが山林や原野となり往時をしのばせるだけで、一般の人々にはその存在すらもあまり知られていません。

津市一身田町上津部田字ヲの坪に所在する峯治城跡もそのうちの一つですが、城跡の一部に都市計画道豊里・久居線の道路改良事業が計画され、平成元年度と平成2年度の2カ年にわたり事前の発掘調査を実施しました。
ここにその結果を報告するとともに、今後の中世城館の研究の一助となりますことを希望しています。

調査にあたりまして、県土木部都市計画課、津土木事務所、津市教育委員会および（財）三重県建設技術センターをはじめ、地元の方々に多大のご協力をいただきましたことに、末尾ではありますが感謝の意を表します。

三重県埋蔵文化財センター
所　長　　中　林　昭　一

例　　言

1．　本報告書は、都市計画道豊里・久居線改良工事にともない緊急発掘調査を実施した津市一身田上津部田字ヲの坪所在の峯治城跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査は次の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

係長　田中喜久雄　主事　田中久生　主事　穂積裕昌（平成元年度）

主事　福田哲也　　主事　田中久生　（平成２年度）

3．調査にあたっては、三重県土木部都市計画課、津土木事務所、（財）三重県建設技術センター、津市教育委員会ならびに地元各位の方々の協力を得た。

4．現地調査にあたっては奈良女子大学教授　村田修三先生にご指導いただいた。

5．発掘調査後の出土遺物の整理を上記の担当者の他、管理指導課が行った。

遺物の写真撮影は田村陽一が担当した。

6．本書の執筆・編集は田中久生が担当した。

7．挿図の方位は、特に断らない限り磁北である。

座標は国土座標第Ⅵ座標系を使用した。

8．本書で用いた遺構表示略号は下記による。

ＳＢ：掘立柱建物・門、ＳＤ：溝・堀、ＳＫ：土坑、ＳＥ：井戸、ＳＸ：通路・橋

目　　次

Ⅰ．前言　1
Ⅱ．位置と環境　2
Ⅲ．遺構と遺物　4
1．第Ⅰ郭　4
2．第Ⅱ郭　18
3．第Ⅲ～Ⅵ郭　21
4．第Ⅶ郭　22
5．第Ⅷ～Ⅻ郭　25
Ⅳ．まとめ　28

挿図目次

第１図　遺跡地形図　2
第２図　略測図　3
第３図　遺跡周辺地形図　3
第４図　調査前地形測量図　5
第５図　調査前郭配置図　7
第６図　遺構平面図　9
第７図　遺構地形図　11
第８図　調査区断面図　13
第９図　ＳＢ８平面図　15
第10図　ＳＤ４埋土土層断面図　16
第11図　第Ⅰ郭出土遺物　17
第12図　ＳＤ４出土遺物　18
第13図　ＳＤ５出土遺物　19
第14図　ＳＸ２４土層断面図　20
第15図　第Ⅱ郭出土遺物　20
第16図　第Ⅲ～Ⅵ郭出土遺物　21
第17図　ＳＥ４１実測図　23
第18図　第Ⅶ郭出土遺物　24
第19図　第Ⅷ郭出土遺物　25
第20図　第Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物　26
第21図　斜面からの出土遺物　27

図版目次

ＰＬ１　航空写真（北西から）　調査前全景（北西から）
ＰＬ２　第Ⅰ郭調査前全景（南東から）　第Ⅷ郭調査前全景（北から）
ＰＬ３　調査前航空写真（南東から）　調査後航空写真（南東から）
ＰＬ４　調査後航空写真（北西から）　調査後全景（北西から）
ＰＬ５　第Ⅰ・Ⅱ郭（北西から）　第Ⅰ郭土塁ＳＡ１
ＰＬ６　第Ⅰ郭土橋ＳＸ７・門ＳＢ８　第Ⅰ郭門ＳＢ８
ＰＬ７　第Ⅰ郭不明遺構ＳＸ１８　第Ⅰ郭堀ＳＤ４・土橋ＳＸ７・堀ＳＤ５
ＰＬ８　第Ⅰ郭堀ＳＤ４　第Ⅰ郭堀ＳＤ４土層断面
ＰＬ９　第Ⅱ郭導入路ＳＸ１９　第Ⅱ郭ＳＢ２６
ＰＬ10　第Ⅶ郭全景（北から）　第Ⅶ郭ＳＫ３１
ＰＬ11　第Ⅶ郭井戸ＳＥ４１　第Ⅶ郭井戸ＳＥ４２
ＰＬ12　第Ⅶ～Ⅻ郭（南から）　第Ⅱ・Ⅷ郭（南西から）
ＰＬ13　第Ⅶ郭全景（北から）　第Ⅸ～Ⅻ郭全景（北西から）
ＰＬ14　羽釜出土状況　天目茶椀出土状況
ＰＬ15　第Ⅰ郭出土遺物
ＰＬ16　ＳＤ４出土遺物　ＳＤ５出土遺物
ＰＬ17　ＳＤ５出土遺物　第Ⅱ・Ⅶ郭出土遺物
ＰＬ18　ＳＤ５出土遺物　第Ⅱ・Ⅷ・Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物
ＰＬ19　第Ⅲ～Ⅵ・Ⅶ郭出土遺物　第Ⅷ～Ⅻ斜面出土遺物
ＰＬ20　第Ⅶ郭出土遺物
ＰＬ21　第Ⅷ・Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物
ＰＬ22　第Ⅷ・Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物　第Ⅷ～Ⅻ郭斜面出土遺物

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

Ⅰ．前　言

１．調査にいたる経過

県道豊里・久居線は、久居市内より津市半田から県庁西側を通り津市北部の豊里地区にいたる道路である。昭和５３年度この路線の内ＪＲ・近鉄津駅付近以北の部分について改良事業が計画された。今回調査を行った峯治城は、『伊勢名勝志』などで古くからその存在が知られていたが、第一次調査（分布調査）の結果、約５，０００㎡が事業地内に含まれることが判明した。

その結果をもとに県土木部都市計画課および津土木事務所と協議を行い、その保存策などを検討した結果、路線変更も困難であるため、該当部分について第二次調査を行うこととなった。

発掘調査は２年度に分けて行なった。平成元年度は８月１日から２年２月１０日まで、平成２年度は５月７日から７月２１日までであった。最終調査面積は約４，８００㎡であった。

２．調査の方法

調査区の総延長が約１２０ｍとなること、最高部と最低部の比高差が約１７ｍあることなどから、発掘区内の地区設定については、４×４ｍのグリッドを基本として、それぞれの郭で独立したものとした。

郭は最高部を第Ⅰ郭とし北側へ順に第Ⅱ郭、第Ⅲ郭というように設定した。第Ⅰ郭より東側の郭は第Ⅷ郭より開始し順に設定した。斜面については傾斜が急なこともあり、グリッド設定は特に行わず、斜面ごとに番号を付けることとした。

平成元年度は標高約２４ｍの第Ⅰ郭より開始し、北側の郭へと進むこととした。そして平成二年度に東側の郭を発掘調査した。第Ⅰ郭と第Ⅱ郭は急斜面のため重機の導入が不可能であったため、人力により表土包含層を掘削したが、第Ⅲ郭以降は重機（バックホウ）により抜根、表土除去を実施した。　排土は、調査地の両側が民有地であり、かつ竹林であったため調査地の両側に排出することは不可能であった。そのため、掘削により生じた土砂は計画路線内に排出する必要があり、ベルトコンベアにより調査地外の北西と南東の計画路線内に排出した。

峯治城全景（北東上空から）

Ⅱ. 位置と環境

1．位置

峯治城は、津市一身田大字上津部田字ヲノ坪に所在する。峯治城のある津市北部は、伊勢平野のほぼ中央部を、平野を横断して東流する志登茂川、安濃川の中下流域に位置する。志登茂川は、安芸郡芸濃町の丘陵にその源を発し、その下流域によく沖積された平野を、安濃川とともに形成する。志登茂川右岸には標高３０ｍ前後の丘陵が安芸郡芸濃町内より津市広明町（ＪＲ・近鉄津駅付近）まで延びている。地質学的には中生代第三期（鮮新世）層の奄芸層群からなる（註１）。

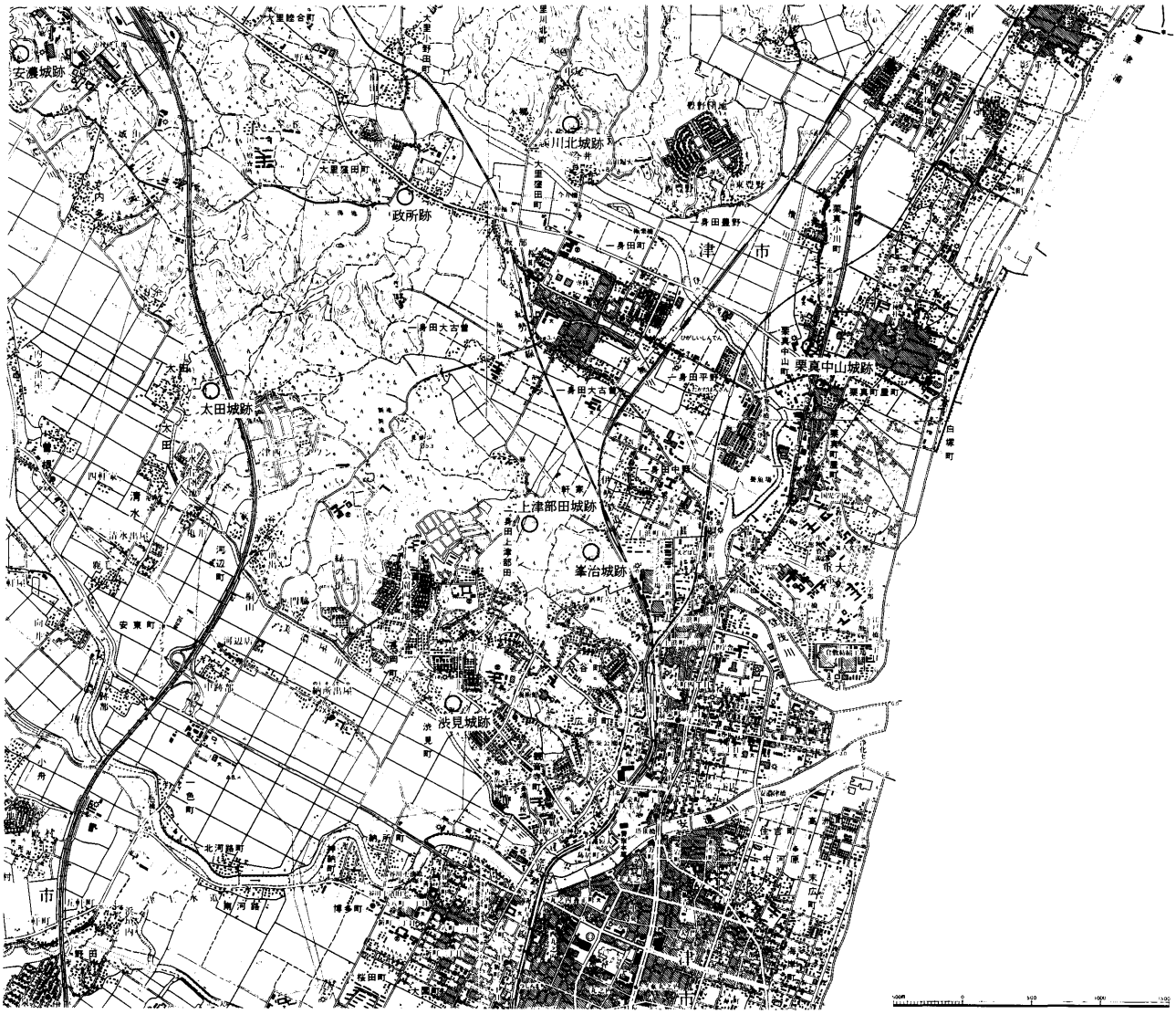
峯治城（１）はこの丘陵の北東端部に位置する。ここは伊勢平野が最も狭くなっているところでもある。標高２５～３０ｍ近くを測り、眼下に参宮街道、伊勢平野はもとより伊勢湾、知多半島を一望する眺望の利く好所に位置している。

2．歴史的環境

志登茂川流域を中心に時代順に概観するのが本来であるが、ここでは中世城館の分布を中心に述べてみたい。

中世、この地域は長野氏が支配していた。長野氏の出自などは、工藤一族という以外あきらかではないが、鎌倉時代末期には居住していたようである。

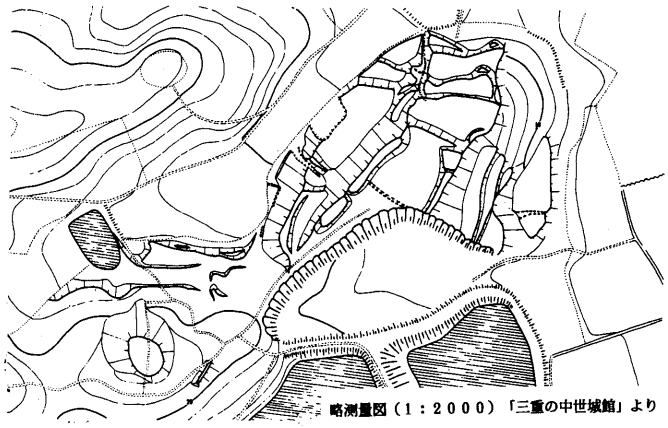
その被官には雲林院家・家所家・草生家・細野家・



第１図　遺跡位置図１：50,000（国土地理院１：25,000 椋本・白子・津西部・津東部）

分部家などがみられ、安濃郡と奄芸郡を支配していた（註２）。奄芸郡に属する中世城館は川北城、高野尾城、栗真中山城、上津部田城などが知られる。川北城、上津部田城は近年発掘調査がなされ川北城は平安時代末から南北朝期にかけての大規模な城館であることが判明した（註３）。安濃郡では安濃城、太田城、分部城、浄土寺城、渋見砦などが知られる。

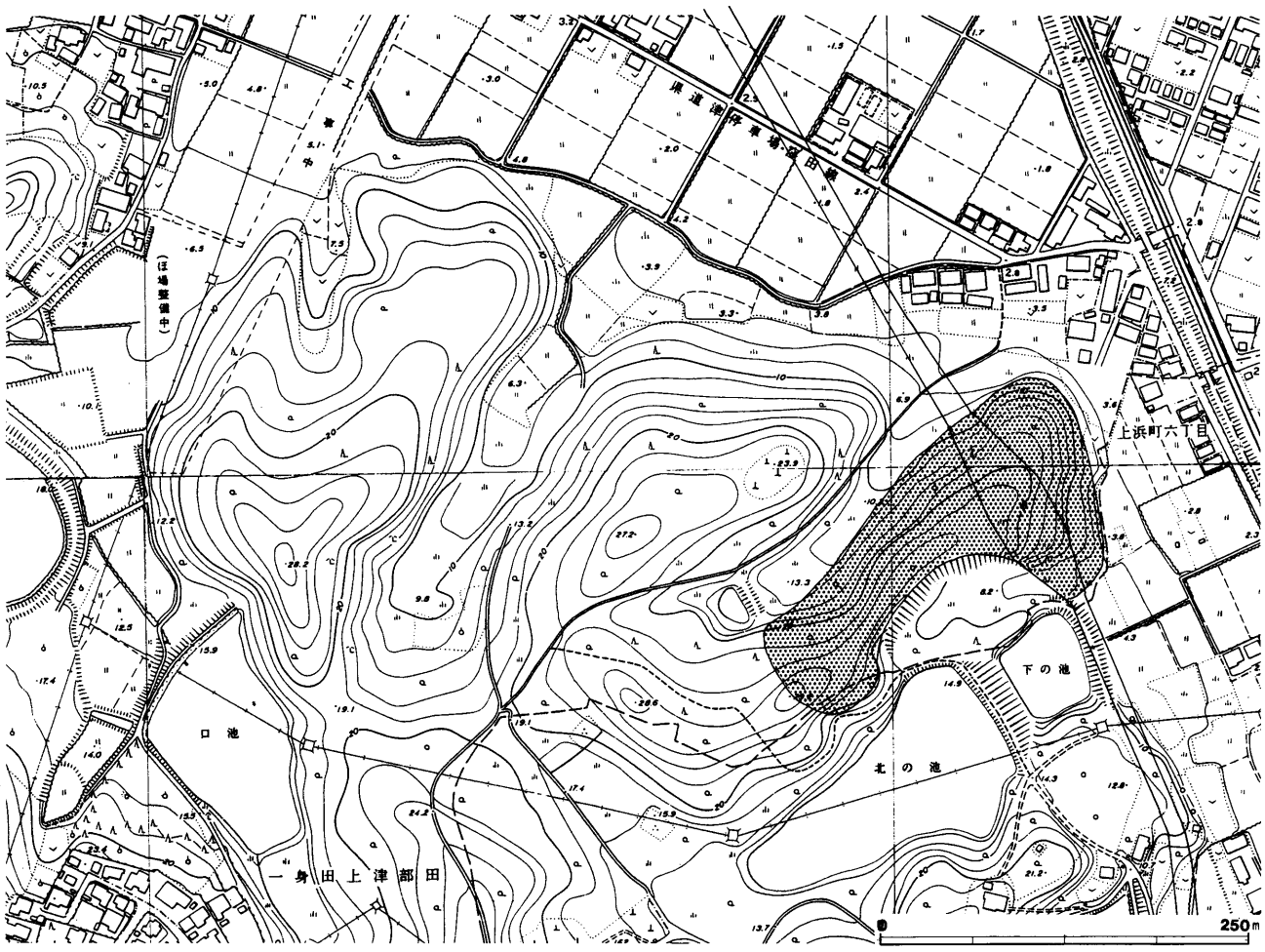
室町時代末期、織田信長の伊勢侵攻を境に工藤氏の支配は終わる。



城館名　一身田上津部田ヲノ坪　6621・470
地目　山林　立地　丘陵　規模　150×130m
時代　応永　城主　佐脇勝久　備考
概要　佐脇勝久が応永年中にこゝに築城する。永禄11年（1568）、織田信長が伊勢を攻略し、そのため滅びる（伊勢名勝志）。城は谷と溜池にはさまれた丘陵端部につくられ、東と西に土塁がのこる。南部は土取りでかなり破壊されている。（和田○安室、大橋紀、前川、井上）

略測量図（１：２０００）「三重の中世城館」より

第２図　略測図



第３図　遺跡周辺地形図１：5,000（津市都市計画図）

Ⅲ. 遺構と遺物

1. 第Ⅰ郭

遺　　構

（1）土塁・堀

ＳＡ１　東辺に築かれた南北方向の土塁である。南部は削平されているため、全長は不明であるが西辺のＳＡ２と同様第Ⅰ郭の東辺を囲っていたものと思われる。現存長（上面）３６．８ｍ、上面幅１１．１ｍ～２．９ｍ、高さ（第Ⅰ郭より）１ｍを測る。北半部が内方に張り出しており、櫓等の存在が想定されたため精査したが確認できなかった。南端部は外側に張り出している。

中央部上面に古墳時代前期頃と考えられる土坑ＳＫが検出されたため、ＳＡ１は現存高までは地山削りだしによって形成されたものと考えられる。中央やや北よりに後世の開墾による溝が切り込んでいる。

ＳＡ２　西辺に築かれた南北方向の土塁である。ほとんどが調査区外であるが、調査区内に８ｍ、全長６７ｍ、上面幅２ｍ、高さ（第Ⅰ郭より）１．４ｍを測る。

ＳＡ３　北辺に築かれた東西方向の土塁である。北辺の出入口ＳＸ６より東側の部分を囲う。現存長６ｍ、幅２ｍ、高さ０，５ｍを測る。上部大半が削平されており基底部が残るのみである。なお北辺西側はほぼ完全に削平されており確認できなかった。

ＳＤ４・５　ＳＤ４はＳＡ３の下に位置し、断面逆台形を呈する。全長２４．１ｍ、幅（ＳＡ１北端より）８ｍ、深さ（ＳＡ１北端より）５．５ｍを測る。底は幅約０．８ｍほどの平面となっている。ＳＤ５は土橋ＳＸ７の西に位置し、本来であれば第Ⅰ郭北辺西半の土塁に対応する堀であり、第Ⅰ郭北端より深さ４．２ｍのところに幅０．２ｍほどの犬走りをＬ字状に巡らす。この犬走りよりも低い部分の断面形は長方形を呈する。ＳＤ４・５ともに完全に埋没していた堀で、調査前にはその存在すら予想しえなかったほどである。埋土の堆積は非常に細かく整然としており、かなりの長年月をかけて埋まったものと考えられる。ＳＤ５の底の部分は、大きな塊状の黄褐色粘質土で埋まっており、ある程度の人工的な埋め戻し作業が行われた可能性が考えられる。

（2）出入口・土橋・門

ＳＸ６　第Ⅱ郭から第Ⅰ郭への通路であり、ＳＡ３の西に位置し、ほぼ北に開口する出入口である。南は平坦であるが北半は緩やかな下りになっておりＳＤ４・５に架かる土橋ＳＸ７にいたる。ＳＸ６とＳＸ７の間は階段でつながれていたような様相を呈していたが確認できなかった。ただ階段以外の方法では距離、比高差からみて、つなげることは困難であろうと考えられる。

ＳＸ７　第Ⅱ郭から第Ⅰ郭への通路であり、堀ＳＤ３・４にかかる土橋である。長さ４ｍ、上面幅３ｍ、下面幅８．８ｍを測る。地山を削って形成したものである。

ＳＢ８　ＳＸ６から郭内に入る門跡である。１間×２間の礎石建物である。長径０．５ｍ前後の花崗岩を礎石として使用している。中柱の中央に径１５cmほどの平らな石が埋め込まれており、戸当たりと考えられる。柱間は桁行きが２．１ｍ、梁間が棟通りより外に１．２ｍ、内に０．９ｍを測る。

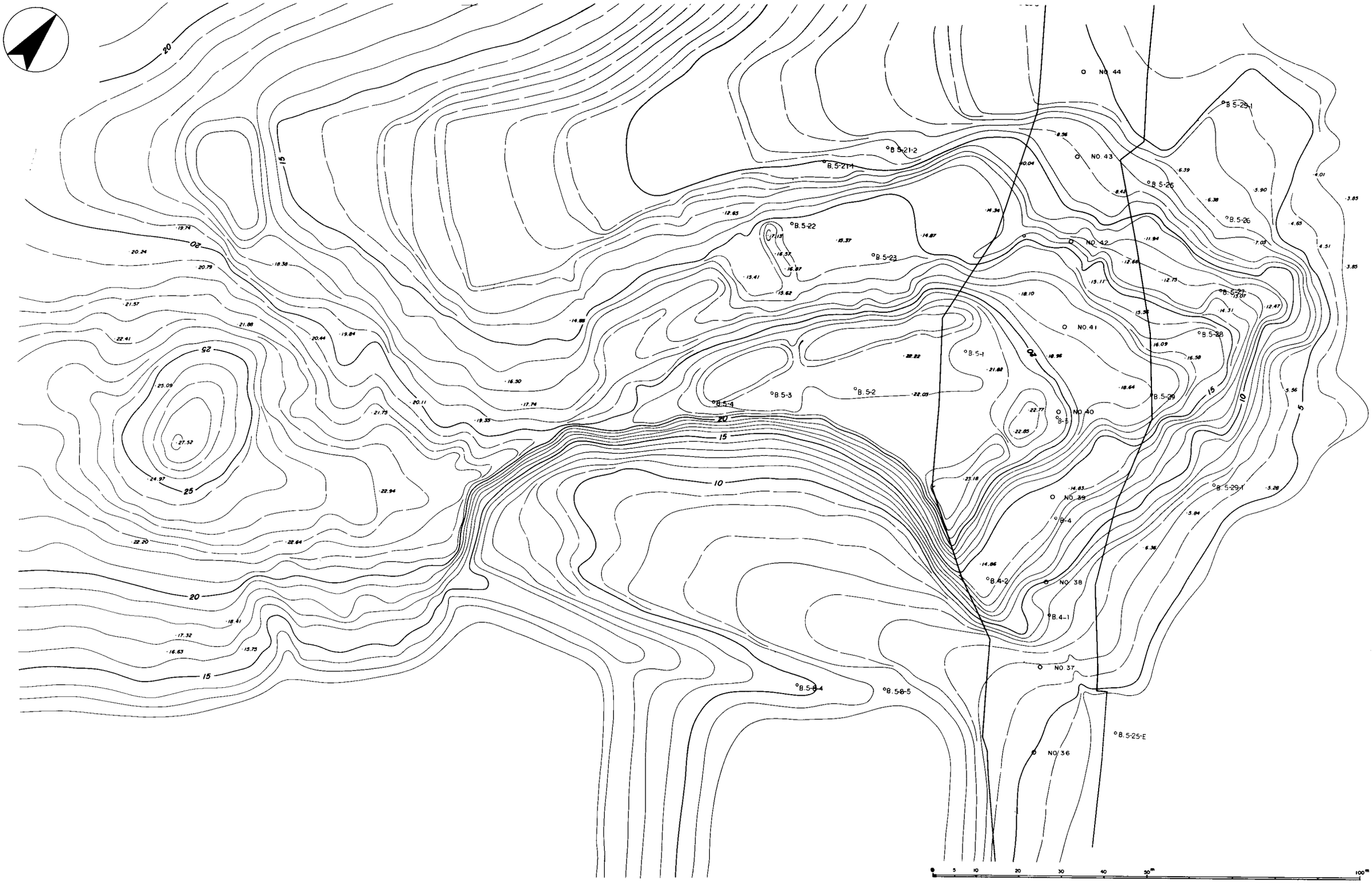
上部構造は２．１ｍ×２．１ｍの四脚門と考えられる。なおＳＢ８の北１ｍほどのところに、柱穴の痕跡と考えられるピット状の遺構が２個東西に並び、ＳＢ８に先行する建物と考え精査したが建物を確認できなかった。しかし、先行建物が存在したのではないかと考えられる。

（3）溝

ＳＤ９　ＳＢ８の東北端より北に延びる長さ４ｍ、幅０．３ｍの溝である。ＳＢ８の排水溝であろう。

ＳＤ１０　ＳＢ８の西北端より約１ｍ北向し、その後東に斜行しＳＤ９と合流する。長さ４．６ｍ、幅０．２ｍを測る。斜行する部分は撹乱により乱されている。

ＳＤ１１　第Ⅰ郭調査部分のほぼ中央に位置する

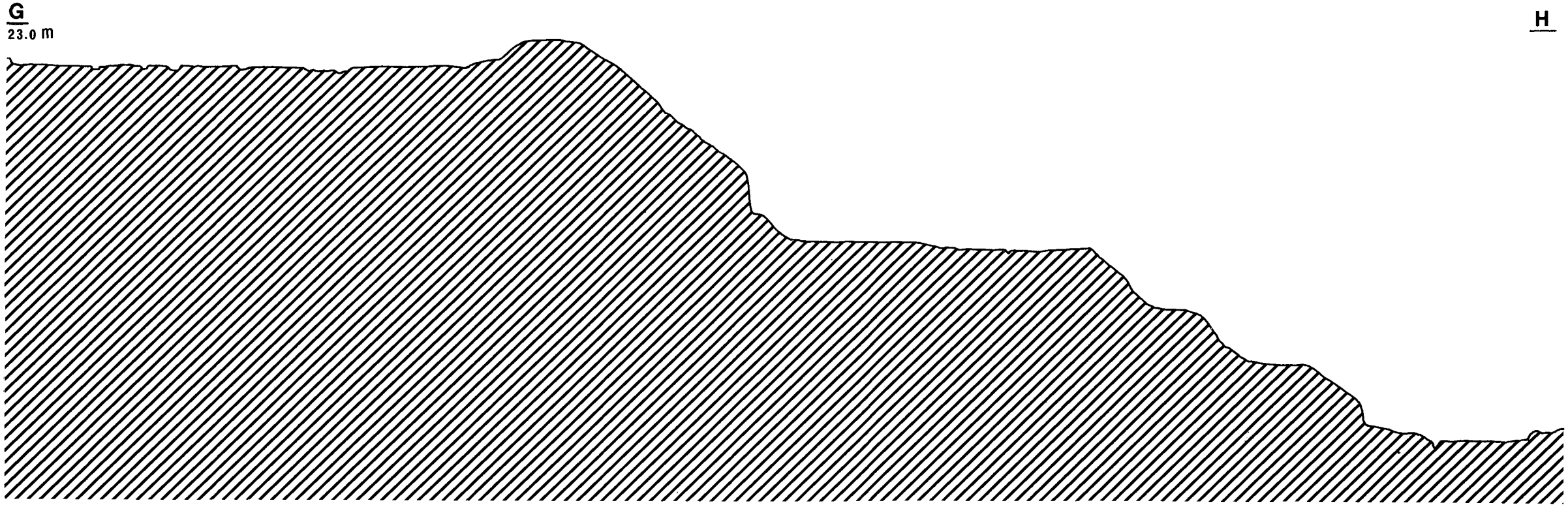


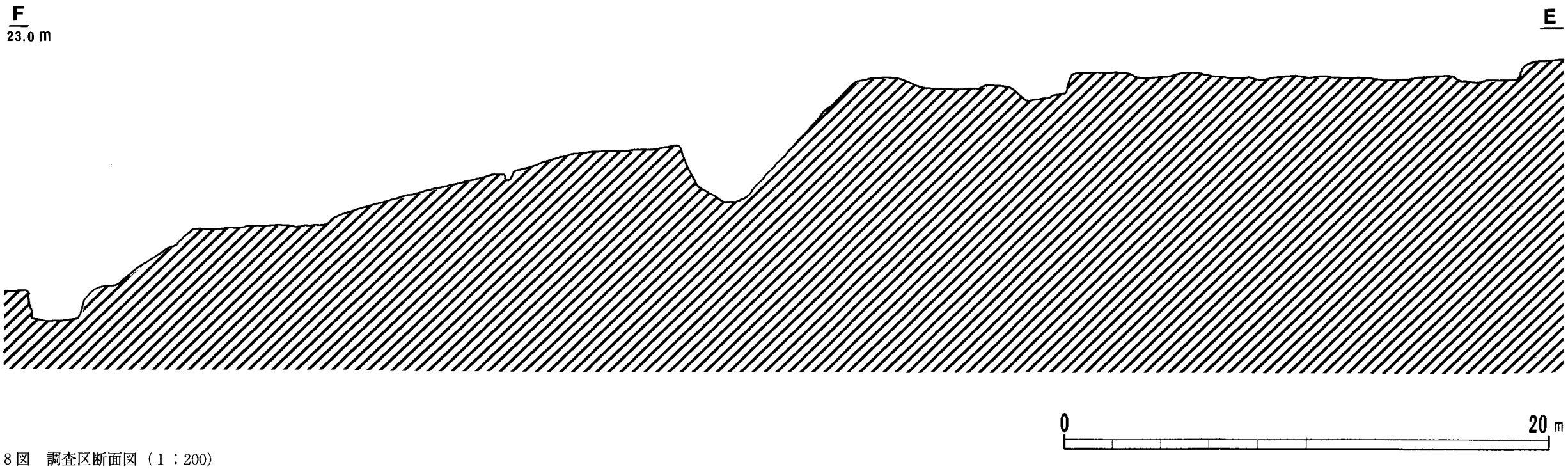
第4図　調査前地形測量図（1：1,000）

第５図　調査前郭配置図（１：1,000）

第６図　遺構平面図（１：200、方位は座標北）

第7図　遺構地形図（1：200）





第8図　調査区断面図（1：200）

L字状の溝である。北西端は開放しＳＢ８に続くものと思われる。通路的な性格を持つものではないかと考えられる。

ＳＤ１２　ＳＸ１８の南西端より西に延びる長さ３ｍ、幅０．２ｍほどの溝である。

ＳＤ１３・１４　第Ⅰ郭の中央を東西に通る溝である。後世に掘られたものと考えられる。

（４）井戸

ＳＥ１５　直径２ｍの素掘りの井戸である。深さ４ｍまで掘削したところ、フラスコ状に拡がっており、土砂が崩落する危険があったため掘削を中止せざるを得なかった。そのため深さは不明である。

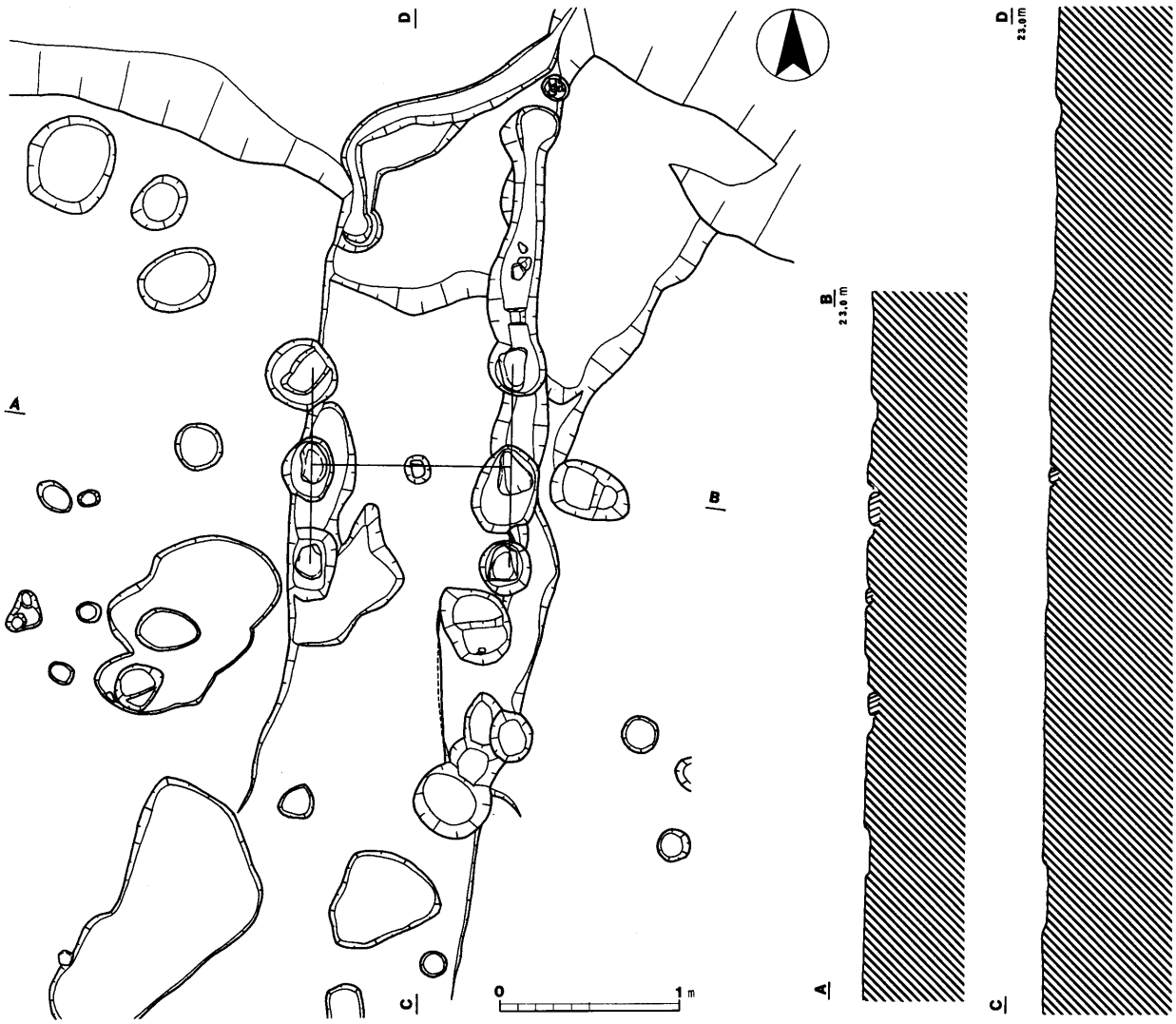
（５）土坑

ＳＫ１６　第Ⅰ郭の南西隅に位置する。調査区によって限られたため北東隅を検出したにとどまる。そのため全体の形状は不明である。北東隅はほぼ直角を呈する。

ＳＫ１７　ＳＡ１上面で検出した。２．２ｍ×２．２ｍのほぼ方形の土坑である。古墳時代前期の土師器が出土しており、城郭に先行する遺構である。

（６）不明遺構

ＳＸ１８　ＳＢ８の南３ｍに位置する。２．８ｍ×１．８ｍを測る。幅０．３ｍほどの溝を長方形に巡らせた遺構である。性格は不明であるが、門の奥に位置することから板囲いの小屋状の建物であった可能性も考えられる。



第９図　ＳＢ８平面図・断面図（１：40）

遺　　物

土師器　皿（１～１６）　口縁部の形態、調整から２種類に分けられる。Ａ類としたものは口縁部が底部から緩やかに内湾し、内面から口縁部外面までをナデ調整、底部外面を指オサエする。Ｂ類としたものは口縁部の内外面をヨコナデ調整することにより底部と明瞭に区別できるものである。

Ａ類（１～１２）

（１）は口径１１．０cm、器高２．０cm、淡黄橙色。
（２）は口径１１．８cm、器高１．９cm、黄橙色。
（３）は口径１０．８cm、器高１．６cm、淡黄橙色。
（４）は口径１１．０cm、器高２．０cm、淡黄橙色。
（５）は口径１２．４cm、器高２．０cm、淡黄褐色。
（６）は口径１３．０cm、器高１．５cm、暗茶色。
（７）は口径１２．０cm、器高２．０cm、淡褐色。
（８）は口径１２．０cm、器高２．２cm、淡橙色。
（９）は口径１３．４cm、２．１cm、淡赤褐色。
（１０）は口径１３．０cm、器高２．１cm、淡黄色。
（１１）は口径１３．６cm、器高１．８cm、淡黄色。
（１２）は口径１１．８cm、器高１．７cm、淡橙色。

Ｂ類（１３～１６）（１３）は口径１２．０cm、器高１．７cm、淡黄褐色。（１４）は口径１１．８cm、器高１．８cm、明黄褐色。（１５）は口径１２．３cm、器高２．４cm、淡褐色。（１６）は口径１５．０cm、器高２．５cm、淡黄橙色。

土師器　羽釜（１７）　口径（復元）１８．８cm、口縁部内面から外面鍔の下までをヨコナデ調整する。淡黄橙色。

山茶椀（１８）　口径１４．６cm、器高４．６cm、淡灰色。体部は直線的である。高台にモミガラ痕を持つ。

青磁　皿（１９）　口径１１．０cm、器高２．２cm、やや濃い青緑色の釉を施す。

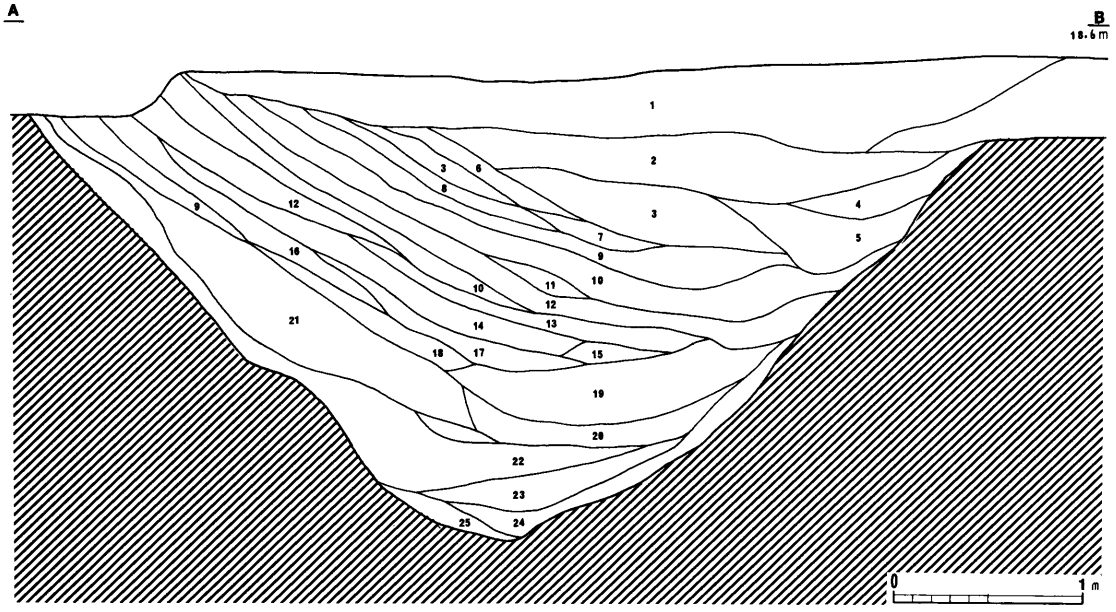
捏鉢（２０）　口径（復元）３３．８cm、淡橙色。軟質である。

擂鉢（２１・２２）　２点とも、口径、器高とも不明。（２１）は暗茶色。筋目は７本単位で６箇所あり、底部近くから掻き上げる。底部近くは使用により摩滅している。

甕（２３・２４）　常滑産大甕の口縁部のみの破片である。

砥石（２７）　粘板岩質。幅５．２cm。

古墳時代土師器（２６・２６）　（２５）は鉢で



1　灰褐色土　2　暗灰茶色土　3　暗灰茶色小礫混土　4　茶灰色土　5　淡灰茶色　6　淡茶色土　7　茶色小礫混土　8　茶色礫混土（黒色土ブロック混）
9　茶色礫混土　10　淡茶色土　11　淡茶色小礫混土　12　淡茶色礫混土　13　淡茶灰色土　14　淡灰色土　15　灰色土　16　淡茶色小礫混土
17　淡灰色礫混土　18　茶色土　19　淡灰褐粘質土　20　灰褐粘質土（小礫及び灰色小粘土ブロック混）　21　茶色土（灰色小粘土ブロック混り）
22　灰黄粘質土　23　暗灰色粘質土黄色混　24　暗灰色粘質土（砂混り）　25　黄褐色砂質土

第10図　ＳＤ４埋土土層断面図（１：40）

口径１５．８cm、器高１０．３cm、橙色。

１・２・４はＳＥ１５付近のピットから、３・１１はＳＤ１１から、７・８・９・１１・１２・１４・１５・１７はＳＫ１６から、１６・２２はＳＥ１５から、２５・２６はＳＫ６から、その他は包含層からの出土である。

ＳＤ４出土の遺物

土師器　皿（２８）　全体をユビオサエで整形したのち口縁端部をヨコナデで整える。

土師器　鍋（３７）　口径２１．０cm、黄橙色。口縁部及び体部外面上部をヨコナデ調整する。

土師器　羽釜（３８）　口径２２．６cm、黄橙色。口縁部及び鍔の下までをヨコナデ調整する。体部外面上部はハケ調整、下部は板ナデ調整を施す。

施釉陶器　皿（２９・３０）　（２９）は口径１１．６cm、器高３．１cm、（３０）は口径１２．０cm、器高３．１cm。いずれも淡緑色の灰釉を高台内側以外の全面に施す。生地はロクロナデにより調整され、淡灰白色を呈する。瀬戸産と考えれる。

天目茶椀（３１～３４）　（３１）は口径１２．０cm。（３２）は口径１１．４cm。（３３）は口径１２．０cm。（３４）は高台径３．８cm。いずれも黒褐色の鉄釉を施す。

施釉陶器　丸椀（３５・３６）　（３５）は口径１０．２cm、淡緑色の灰釉を施す。（３６）は口径１０．２cm、器高６．２cm、体部内面及び外面上部に淡緑色の灰釉、外面下部に暗茶色の鉛釉を施す。

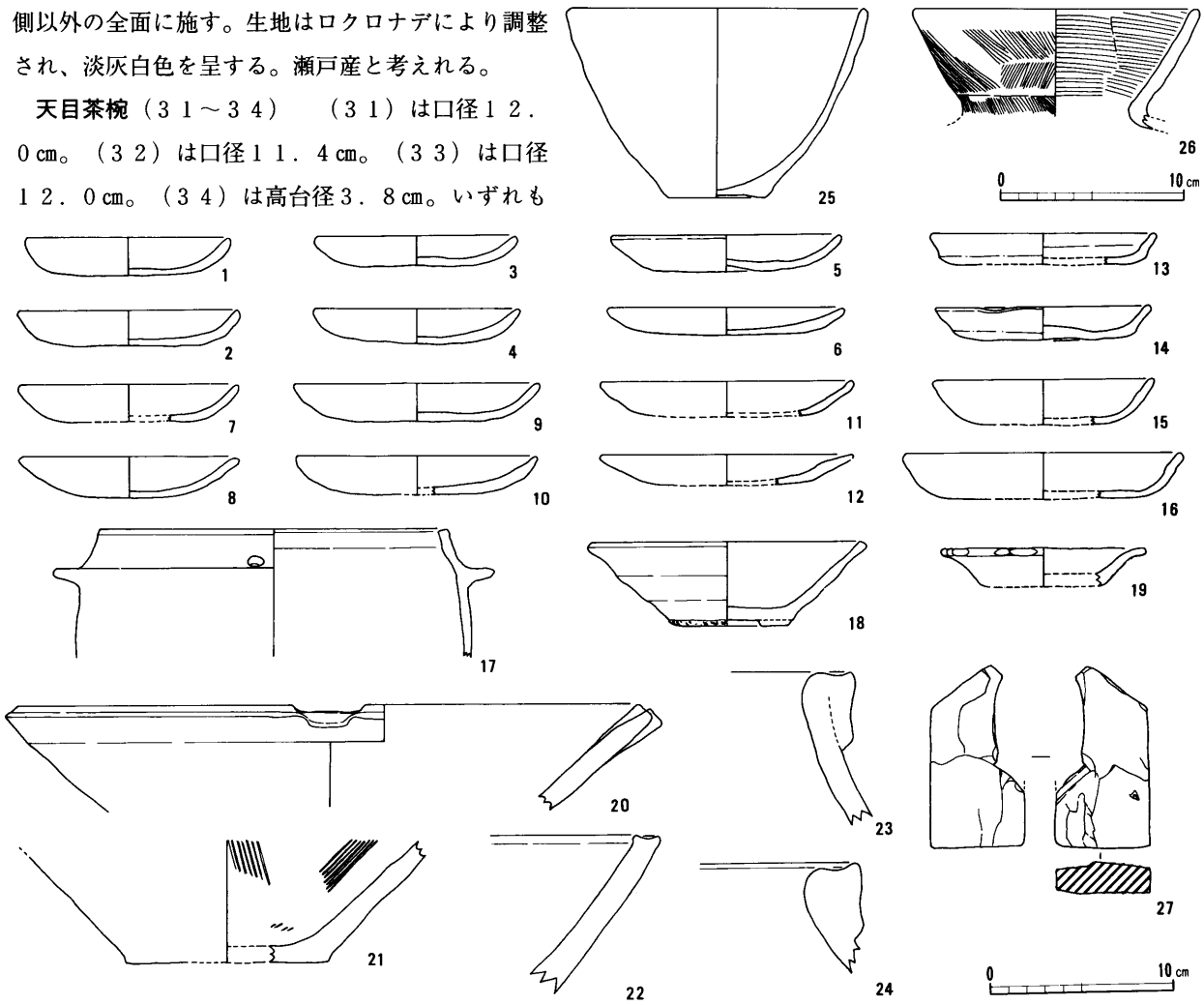
青磁　椀（３９）　底部径５．４cm。見込みに陰刻を施す。

擂鉢（４０・４１）　（４１）は底部径９．６cm、暗赤灰色の鉄釉を施す。筋目は８本単位で８箇所、底部付近から掻き上げる。底部内面にも十文字状に施す。

甕（４２）　常滑産の大甕である。口径不明。

五輪塔（４５・４６）　一石五輪塔の空風輪部（４５）と水輪地輪部（４６）である。砂岩質。

その他の遺物　（４３）は火舎の破片と考えられる。暗灰色。（４４）は粘土をやや扁平に丸め、焼成している。片面にＸ字状のくぼみが施される。



第11図　第Ⅰ郭出土遺物（１：４）

ＳＤ５出土の遺物

土師器　皿（４７～５１）

（４７）は口径８．４cm、器高１．７cm、乳褐色。（４８）は口径１０．０cm、器高１．５cm、灰白色。（４９）は口径１２．０cm、器高２．１cm、灰白色。（５０）は口径１１．０cm、器高２．０cm、淡黄橙色。外面にユビオサエ痕が残る。Ａ類。（５１）は口径１４．１cm、器高２．４cm、淡褐色。Ｂ類。

土師器　羽釜（５２～５４）　（５２）は口径３５．８cm、橙色。口縁端部内面から外面の鍔の下までをヨコナデ調整する。外面をハケ調整するが煤が厚く付着しており不明瞭。（５３）は口径２７．６cm、黄褐色。外面に斜め方向のハケ調整を施す。外面には煤が付着する。（５４）は口径２８．４cm、橙色。外面をハケ調整するが煤が厚く付着しており不明瞭。

白磁　三耳壷（５５）　胴部径２５．２cm。片部三方に把手をつける。

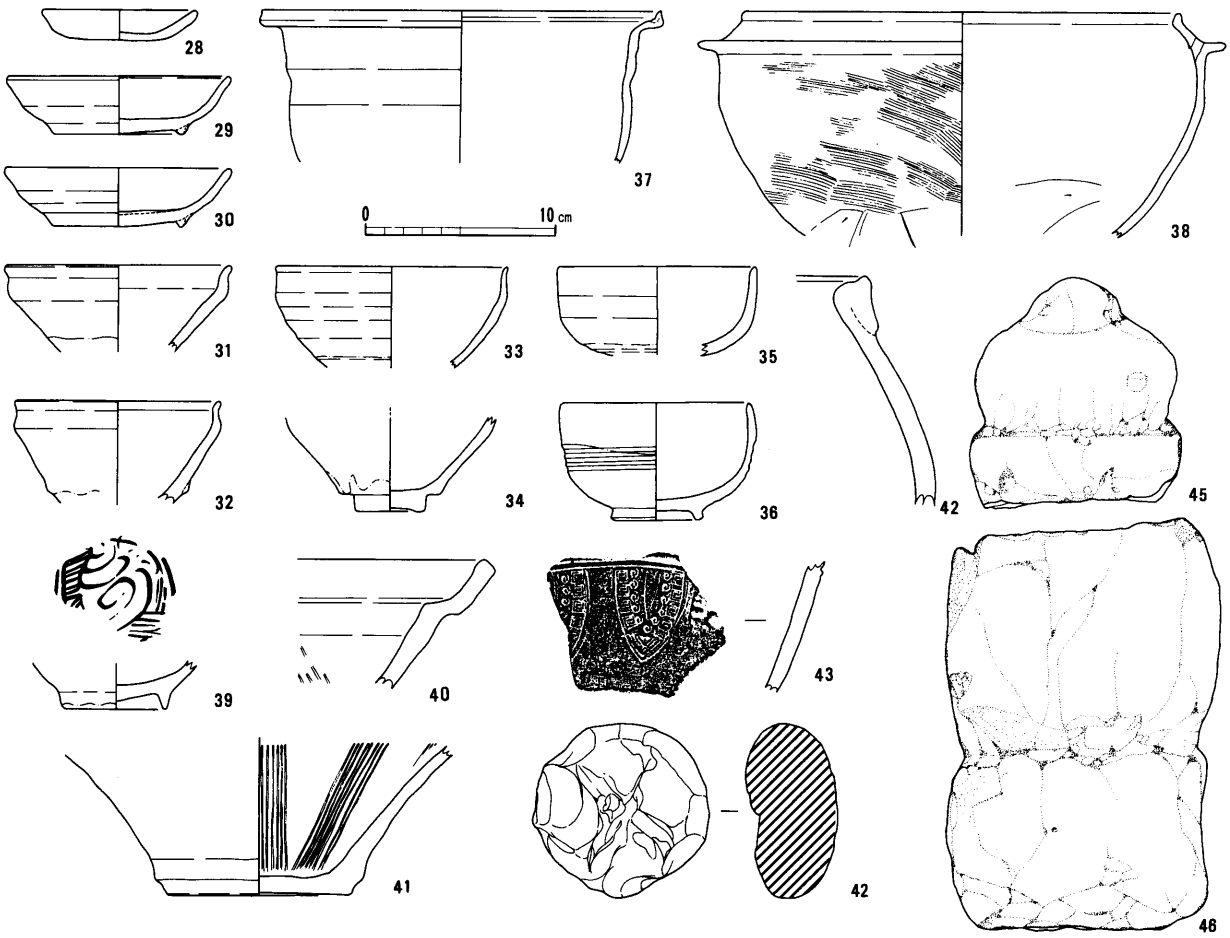
捏鉢（５６・５７）　（５６）口径３０．０cm、器高１２．０cm、橙色。内面に縦方向の板ナデを施す。使用痕明瞭。外面に指圧痕残る。（５７）口径３１．４cm、器高１０．７cm、明赤褐色。内面に縦方向の板ナデを施す。使用痕明瞭。

甕（５８）　口径２４．６cm、暗赤色。常滑産と考えられる。

2．第　Ⅱ　郭

遺　　構

第Ⅰ郭の北に位置する。標高は１８m前後、南北１３m～１５m、東西４０mを測る。北東端部が調査区外に延びる。西端から東へ３２mほどはなだらかな斜面となっておりこれは築城以前の旧地形と考えられる。整地土の面では特に遺構が検出されなかったため、古墳時代前期の土師器片を包含していた黒



第12図　ＳＤ４出土遺物（１：４）

色土層の下面まで掘削した。東部１０ｍは、地山整形により平坦地となっている。このため建物等の存在を予想し、精査したが確認できなかった。径１０cm前後の小ピットが数個検出されたが建物とするにはいたらなかった。

（１）導入路

ＳＸ１９　第Ⅲ郭より第Ⅱ郭に至る導入路である。ＳＤ５の西端部と、第Ⅱ郭の北西端部をやや下ったところに踊り場を持つ。西側面には高さ０．８ｍほどの土塁状の高まりを持つ。

（２）溝

ＳＤ２０　ＳＸ１９の上位の踊り場にあり、長さ４．１ｍ、幅０．４ｍ、深さ数ｃｍを測る。北からやや東よりに向きを変えて流れる溝である。

（３）土坑

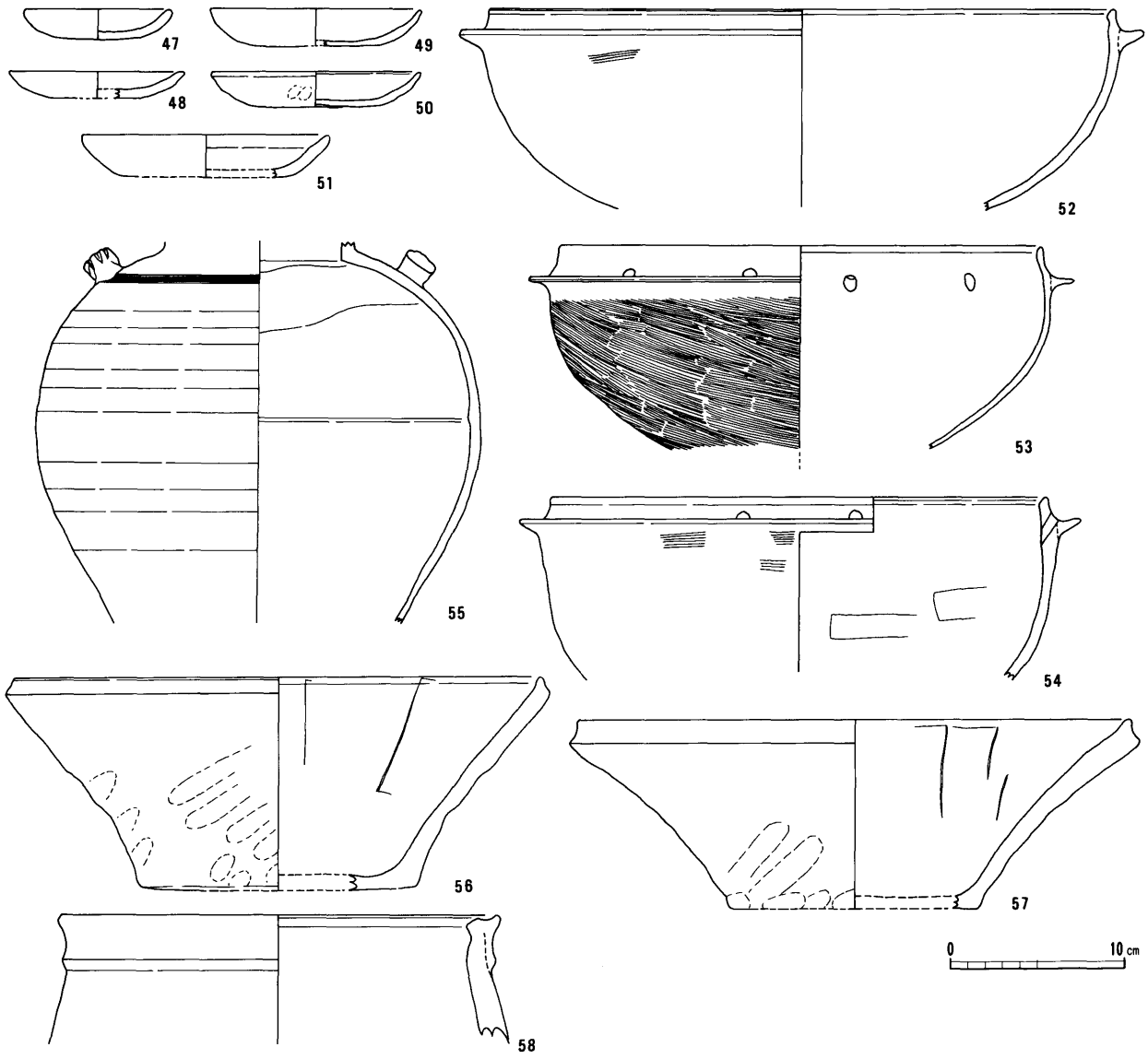
ＳＫ２１　１．６ｍ×１．１ｍ、深さ０．４ｍの方形土坑である。古墳時代前期の土師器片が出土した。

ＳＫ２２　１．８ｍ×１．２ｍ、深さ０．１ｍの長円形の土坑である。遺物も無く根などによる撹乱と考えられる。

ＳＫ２３　２．７ｍ×０．７ｍ、深さ０．１ｍ前後の隅丸長方形の土坑である。中世期のものと考えられる土師器片が出土したが、細片のため遺構の時期、性格を特定し得なかった。そのため城郭に伴うものか否かは不明である。

（４）不明遺構

ＳＸ２４　ＳＡ２北斜面の下端に位置する。一部



第13図　堀ＳＤ５出土遺物（１：４）

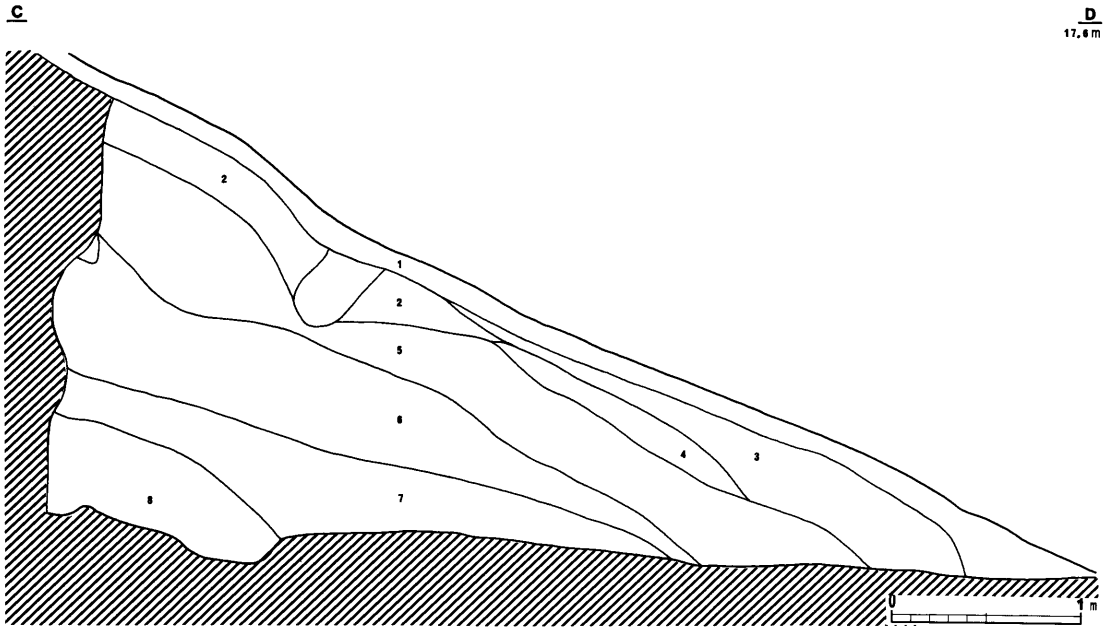
が調査区外となっている。土塁斜面に対し抉るような加工を施している。

遺　　物

土師器　皿（５９）　口径１０．０cm、器高２．２cm、灰白色。体部の立ち上がりから口縁部までを、内外面ともヨコナデ調整する。Ｂ類。

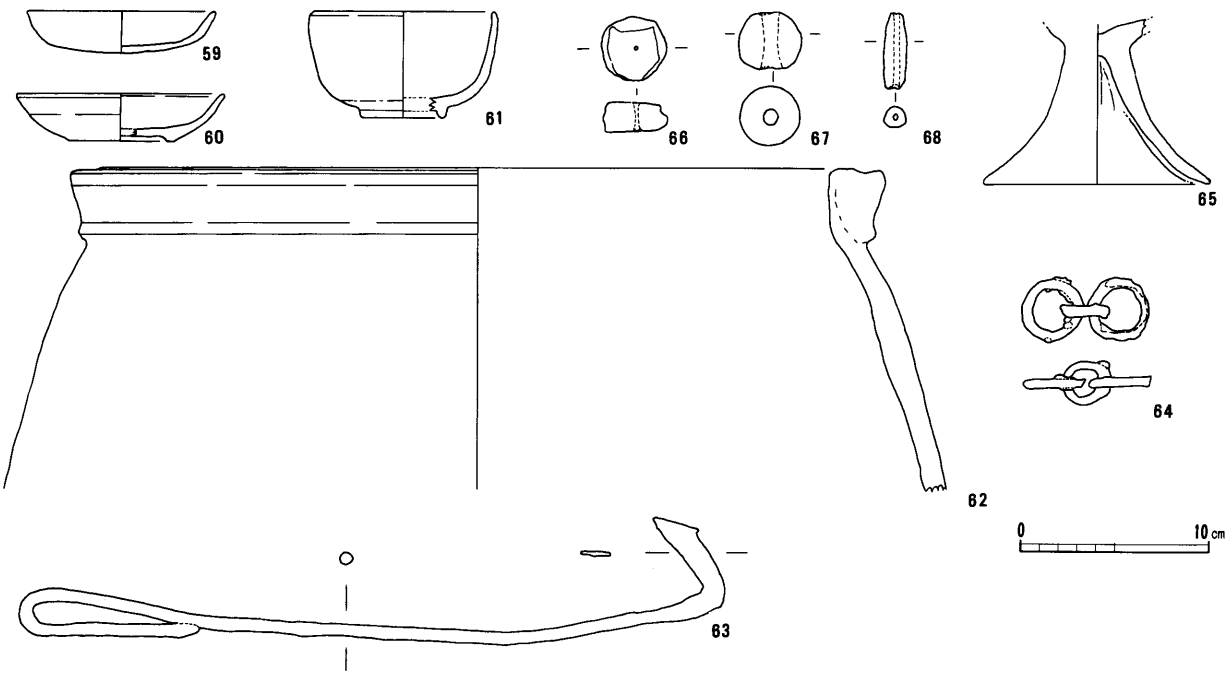
施釉陶器　皿（６０）　口径１１．０cm、器高２．５cm、黒褐色。底部内面にトチンの痕跡が３カ所残る。底部外面にはリング状の釜道具の痕跡が残る。鉄釉が全体に施されているが、内面は二次的に火を受けたと考えられる泡立ちがある。

施釉陶器　丸椀（６１）　口径１０．０cm、器高５．７cm、淡緑色。灰釉を施すが、高台部分は無釉



1　フヨウ土　2　黄褐色土　3　暗茶色土　4　茶褐色土　5　橙褐色土　6　橙褐色土やや砂質混じり土　7　暗褐色＋橙褐色土（小石混じり土）
8　暗橙褐色砂質土

第14図　ＳＸ24土層断面図（１：40）



第15図　第Ⅱ郭出土遺物（１：４）

である。高台は削りだしである。

甕（６２）　口径４２．０cm、暗赤褐色。口縁部のみの破片である。常滑産と考えられる。

鉄製品（６３）　全長３７．２cm。径０．７cmの鉄棒の片側を折曲げて取っ手とし、もう片側を鍵の手錠に曲げ、かつ偏平に加工している。（６４）３．２cmの輪２つを２．６cmの輪でつないでいる。

古墳時代前期　土師器　高杯（６５）　底径１２．１cm、赤褐色。脚部のみである。損傷がひどく調整は不明である。

その他の遺物（６６～６８）

（６６）径３．４cm、厚１．６cm、黒灰色。瓦質とも考えられる。土器の高台部分を再加工したものである。中央に径０．２cm程度の穴を穿ち、紡錘車として使用したものと考えられる。

（６７）径３．１cmのほぼ球状である。暗黄橙色。中心に径０．８cm程度の穴を穿つ。土錘か。

（６８）土錘。全長４．０cm、径０．８cm、橙色。

すべて包含層出土である。

３．第Ⅲ～Ⅵ郭

遺　　構

調査面積、遺構数ともに少ないため、まとめて述べることとする。

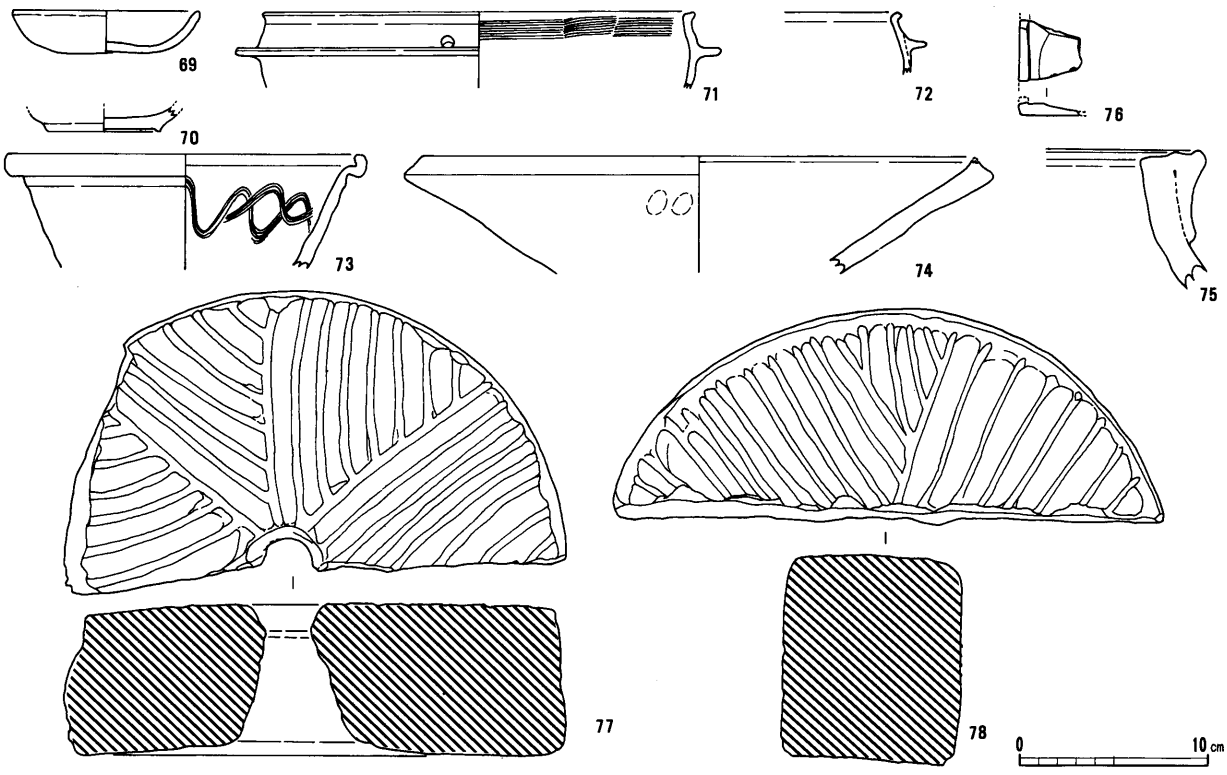
第Ⅲ郭　東端部を調査したのみである。調査区外を含めると東西１９m、南北５５mを測る、峯治城で２番目の面積を持つ郭である。ＳＸ２２の斜面裾に沿って幅１．２mほどの浅い溝があるが、調査前から溝状の落ち込みが認められ、後世の掘削によるものと考えられる。

第Ⅳ郭　西半部を調査した。調査区外を含めると東西３７m、南北１２m～５mを測る細長い郭である。西端部は、調査前にはこの部分を道としていたようであり、後世の撹乱によるものか、崩れているがほぼなだらかな斜面であり、ＳＤ２４の存在を考え合わせると第Ⅱ郭への通路であるとも考えられる。

（１）　**土坑**

ＳＫ２５　調査区東端で検出した。東西１．２５m、深さ０．１mを測る。

（２）　**掘立柱建物**



第16図　第Ⅲ～Ⅵ郭出土遺物（１：４）

ＳＢ２６　西端より１３ｍのところで検出した、１間×１間の建物である。柱間は東西、南北ともに１．７５ｍ、柱穴の深さは０．３ｍ～０．４ｍである。西端部が通路であるならば、門であるとも考えられる。

第Ⅴ郭　西端部を調査した。調査区外を含めると東西２５ｍ、南北１５ｍ～６．５ｍを測る。

土坑

ＳＫ２７　径４ｍのやや角張った円形の土坑である。０．１５ｍ余り掘りくぼめた中に２．１５ｍ×１．２ｍ、深さ０．４ｍの長方形の土坑を掘る。いわゆる二段掘りの土坑である。壁面はしっかりした粘質土である。水を溜めたものかと考えられる。

他に２つの土坑があるが、これらはいずれも根などによる撹乱であろう。

第Ⅵ郭　第Ⅴ郭よりも０．７ｍほど上位に位置するが第Ⅵ郭とした。東西７．８ｍ、南北５．８ｍを測るごく小さな平坦地である。東端を後世の道により撹乱されている。

遺　　物

土師器　皿（６９）　口径１０．０cm、器高２．２cm、灰褐色。内面に炭化物と思われるものが付着している。体部立ち上がりから口縁部までをヨコナデ調整する。Ｂ類。

土師器　羽釜（７１・７２）

（７１）口径２２．６cm、暗橙色。口縁端部から鍔の下までをヨコナデ調整する。内面は横方向のハケ調整である。（７２）口径不明、灰褐色。口縁端部を折り返し図示した部分全体をヨコナデ調整する。

施釉陶器　皿（７０）　高台径６．０cm、緑灰色の灰釉。底部内面に陰刻を施す。瀬戸産。

施釉陶器　鉢（７３）　口径１９．０cm、緑灰色。灰釉。内面上部に、櫛状工具による幅２cmほどの波状文を２条施す。

捏鉢（７４）　口径（推）２９．０cm、橙色。口縁部をヨコナデ調整する。体部外面に指圧痕残る。

甕（７５）　口径不明、暗赤褐色。鉄釉。常滑産と考えられる。

石製品（７６～７８）

硯（７６）　現存３．２cm×３．２cm、厚０．６cm。小型の硯の破片である。材質は泥岩か。

石臼（７７・７８）　径は（７７）が（推）３３．２cm。厚は（７７）が８．０cm、（７８）が９．５cmである。２点とも、下段の約１／２の破片である。材質は花崗岩と考えられる。

７１・７３・７６は第Ⅲ郭包含層出土。７０は第Ⅳ郭包含層出土。他は第Ⅴ郭ＳＫ２７出土である。

4．第 Ⅶ 郭

遺　　構

峯治城の北面の郭の内、最も低所に位置する郭である。東西２６ｍ、南北１０ｍを測る。

（１）掘立柱建物

ＳＢ２８　北西部に位置する。２間×４間の掘立柱建物である。棟方向は座標北に対し3°西偏する。東の柱通りの２個と北西隅の、併せて３個の柱穴を欠くが掘立柱建物と考えたい。柱間は桁行き、梁行きともに１．４ｍである。柱穴の直径は０．１ｍ～０．３ｍと小さい。

（２）土坑

ＳＫ２９～ＳＫ３８　深さ０．１ｍ～０．３５ｍの偏平な、不定形土坑である。

（３）井戸

ＳＥ３９・４０　両者とも直径１ｍ余の素掘り井戸である。壁が砂質土であり、２．６ｍほど掘り下げたところで崩落の危険が生じ、掘削を中止した。

ＳＥ４１　石組井戸である。掘形の直径は２．１ｍ、石組の直径は検出した上部で０．８５ｍ、最下部で０．６５ｍを測る。石材は丸い河原石が大半であるが、五輪塔の部材も転用されている。遺構検出面より３．２ｍ掘り下げたところで崩落の危険が生じたため掘削を中止した。

ＳＥ４２　立て板を丸く組んだ板組の井戸である。掘形の直径は１．８ｍ、板組の直径は１．２ｍを測る。板組は幅２０cmほどの板を１０枚使用している。後世の開墾時に造られたのものと考えられる。

（４）溝

ＳＤ４３～４７　中央部西寄りに位置し、東西方

向に延びるごく浅い溝である。後世の開墾時に掘られたのものと考えられる。

遺　　物

土師器　椀（７９）　口径１２．４cm、器高３．８cm、暗橙色。口縁部をヨコナデ調整する。体部内外面はナデ調整である。器形に歪みがあるため、器高は最大部分を計測した。口縁部に煤の付着があり、灯明皿として使用されたものと考えられる。内面に油脂類と思われるものが付着している。

土師器　内耳鍋（８４）　口径３９．４cm、橙色。内面の口縁より約１／３以下をヘラケズリ調整する。他はヨコナデ調整する。内面にハクリ痕があり突起がつくものと考えられる。

土師器　羽釜（８５・８６）　２点とも口径２４．０cm、淡橙色。口縁部内面から鍔の下までをヨコナデ調整する。他はユビオサエ調整とナデ調整を施す。口縁端部の形態が異なり、（８５）がややシャープな印象を受ける。鍔部以下には、煤が付着している。

土師器　茶釜（８３）　口径１４．０cm、淡橙色。全体にヨコナデ調整を施す。

施釉陶器　皿（８０・８１）
（８０）は口径８．５cm、（８１）は口径８．０cm。２点とも赤褐色の釉を内面から口縁部外面にかけて施す。一部は体部外面に垂れる。体部内面の中央付近から上方に、別の口縁が立ち上がる。この口縁を仮に第２口縁とする。焼成前に、第２口縁の一カ所を、幅２cmほどヘラで丁寧に切り欠く。内外面には煤、その他の付着物はみられない。用途は不明。

天目茶椀（８２）　口径１２．２cm、黒褐色。鉄釉。釉の部分に艶がなく、若干泡立つようである。２次的に火を受けているものと考えられる。生地の部分は灰色を呈する。

青磁　椀（８７）　緑青色。底部内面に陰刻花文を施す。体部内外面にも陰刻を施す。

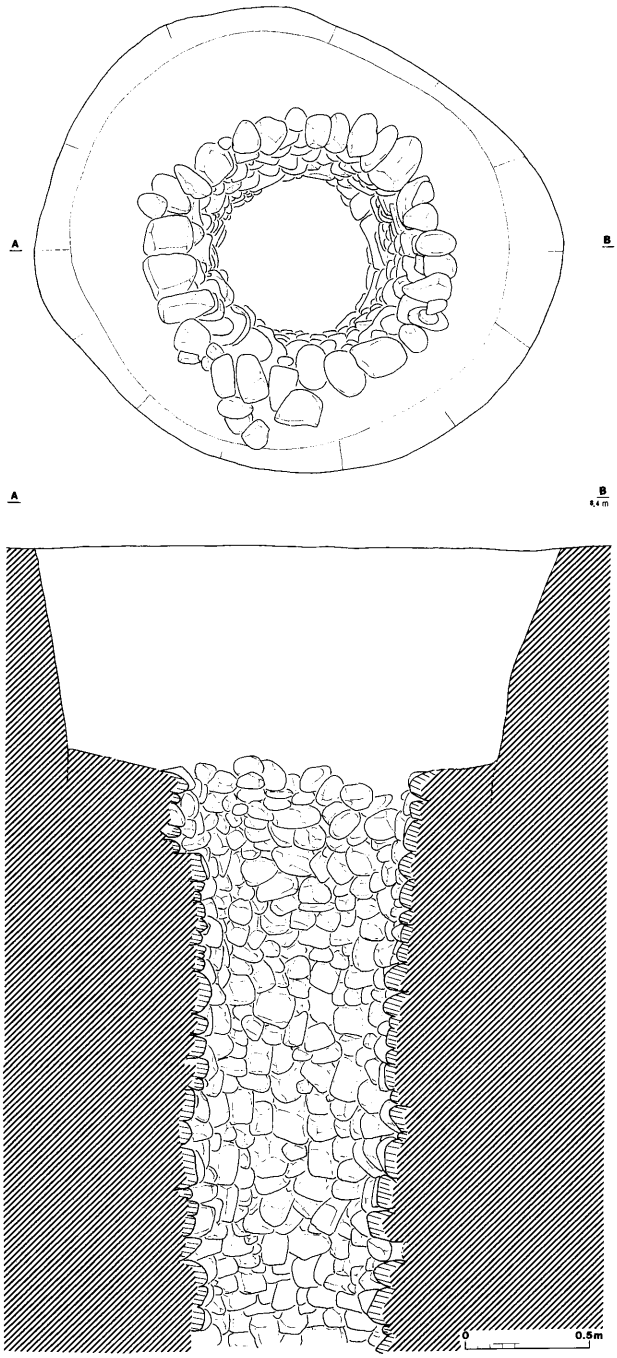
壷（８８）　口径１６．２cm、暗赤褐色。陶器。

鉢（８９・９０）　（８９）は口径１７．０cm、暗赤褐色。（９０）は口径２０．０cm、赤褐色。２点とも軟質の陶器のようである。（９０）は２次的に火を受けたようである。火舎か。

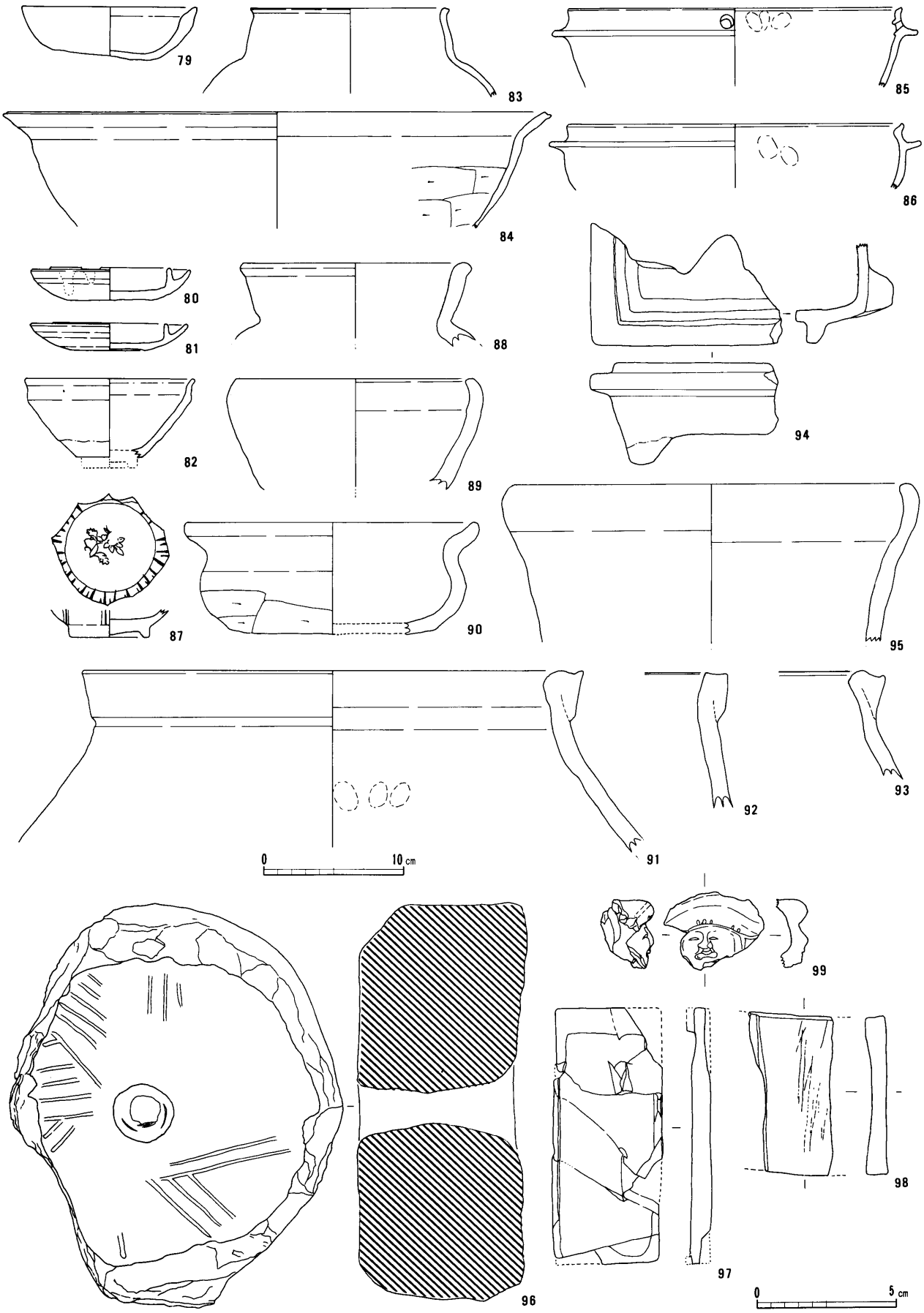
甕（９１～９３）　（９１）は口径３６．０cm、他は不明。

香炉（９４）　方形の香炉の一隅である。器高８．２cm、灰黄白色。高さ２．１cmの脚を、四隅に持つと考えられる。脚部および底部内面に煤の付着する部分がある。土師質に近い。

風炉（９５）　口径２９．８cm、淡褐色。口縁部をヨコナデ調整する。内面に煤と思われるものが付着する。瓦質土器。



第17図　ＳＥ41実測図（１：30）



第18図　第Ⅶ郭出土遺物（1：4、但し 97～99は 1：2）

石製品（９６～９８）

石臼（９６）　径（推）３３．２cm、厚１１．６cm。下段の一部である。材質は花崗岩と考えられる。

硯（９７）　縦９．２cm×横３．８cm、高さは周縁で０．６cm。中央部で０．４cm材質は粘板岩と考えられる。

砥石（９７）　長５．６cm、幅は不明。材質は緑泥岩と考えられる。

その他の遺物

土人形（９９）　七福神の一人、布袋の頭部と考えられる。

７９・８５はＳＫ３０、９０はＳＫ３３、９１はＳＫ３１、９３はＳＫ３２、９４・９６はＳＥ４１、９７はピット、その他は包含層からの出土である。

5．第Ⅷ～Ⅻ郭

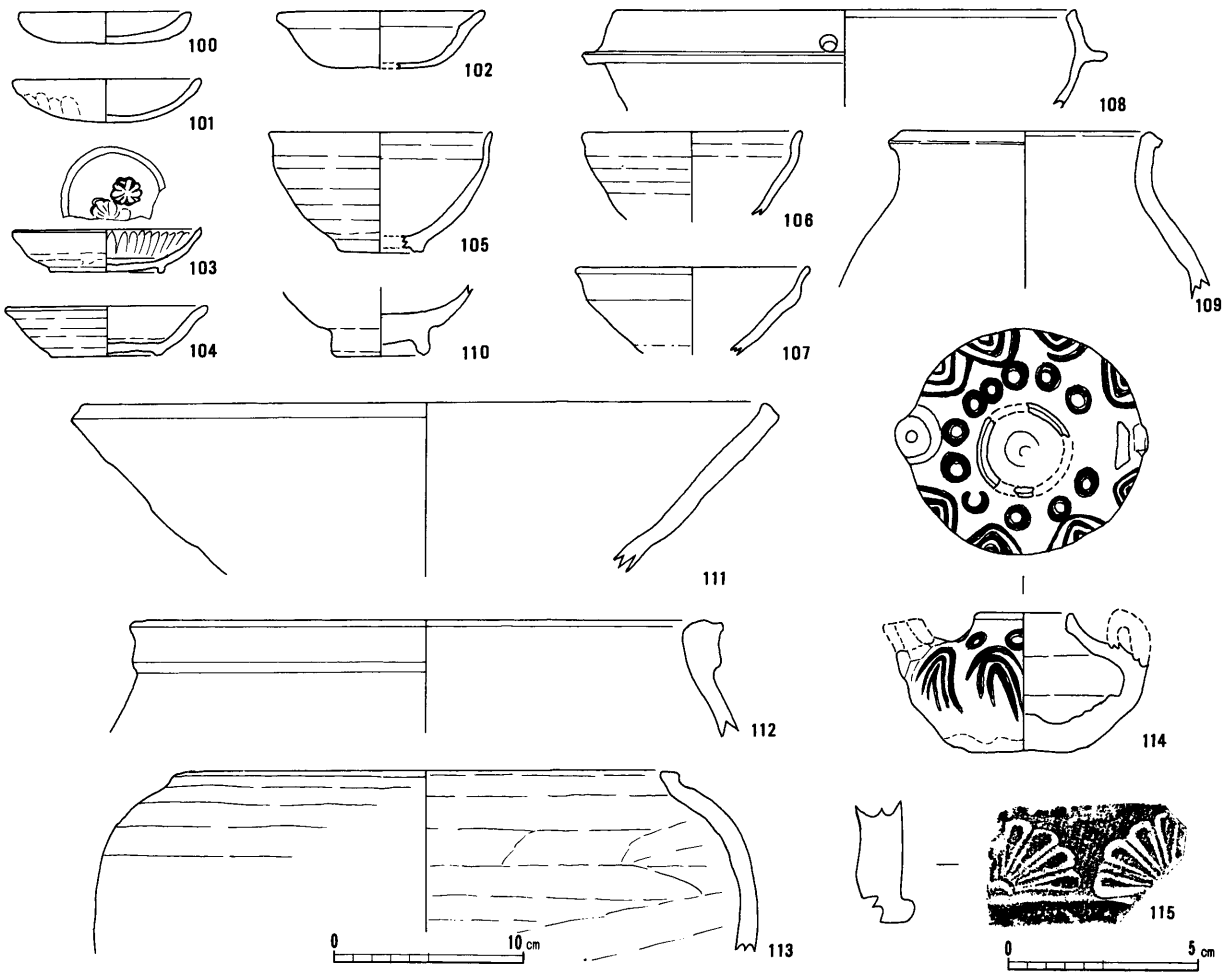
遺　　構

第Ⅷ郭　第Ⅰ郭の東側に位置する。現存南北長５０m、東西長１０～１２mを測る。南部を削平されているため南北長は不明である。いくつかのピットを検出したが、建物としてまとまるものは確認できなかった。

第Ⅸ郭～第Ⅺ郭　第Ⅷ郭の東に位置する。いずれも幅３m余を測る南北に細長い郭である。通路としての性格を持つものではないかと考えられる。

第Ⅻ郭　東側の最も低所に位置する。いくつかのピットと溝などを検出した。

なお、第Ⅻ郭の東側は調査前は水田となっており、重機により掘削を試みたところ、青灰色の砂質土が厚く堆積していることがわかった。堀の存在が予想されたが、湧水と崩落が激しく、掘削を中止せざる



第19図　第Ⅷ郭出土遺物（１：４、但し 114・115は１：２）

を得なかった。

遺　　物

第Ⅷ郭出土の遺物

土師器　皿（１００～１０２）　（１００）口径９．１cm、器高１．７cm、暗褐色。ハクリが激しく調整は不明である。（１０１）口径１０．０cm、器高２．２cm、暗橙色。全体にハクリが進んでおり調整は不明瞭であるが、外面の口縁部以下はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。口縁部は不明。また口縁部は歪がある。

土師器　椀（１０２）　口径１．０cm、器高３．１cm、乳褐色。体部内面及び外面上半部をヨコナデ調整する。

土師器　羽釜（１０８）　口径２４．４cm、暗褐色。ハクリが激しく調整は不明である。

施釉陶器　皿（１０３・１０４）　（１０３）は口径１０．０cm、器高２．３cm、淡緑色の灰釉。底部内面に花文を陰刻する。体部内面には蓮弁状に浅い陰刻を施す。（１０４）は口径１０．４cm、器高２．６cm明赤褐色。鉄釉。

天目茶椀（１０５～１０７）　（１０５）は口径１１．８cm、器高６．４cm、黒褐色。鉄釉。（１０６）は１１．４cm、黒褐色の鉄釉。（１０７）は口径１２．３cm、黒褐色。鉄釉。

陶器　壷（１０９）　口径１３．０cm、明褐色、胴部内面に指圧根が残る。

青磁　椀（１１０）　高台径７．２cm、淡緑色。

捏鉢（１１１）　口径３６．２cm、口縁部及び外縁上部は暗褐色。鉄釉。他は淡橙色。外面下半部に指圧根が残る。

甕（１１２）　口径（推）３１．２cm、外面は暗茶褐色、内面は明褐色。常滑産と考えられる。

陶器　甕（１１３）　口径２４．０cm、外面は淡橙色、内面は暗赤褐色。

施釉陶器　水滴（１１４）　胴部径６．０cm、濃緑色の灰釉を施す。上部には筒状工具によるリング状の陰刻、胴部には蓮弁状の陰刻を施す。口先と取っ手を欠損する。瀬戸産と考えられる。

火鉢（１１５）　厚１．２cm、橙色。瓦質の外面に菊花文の上半部を連続的に施文する。

第Ⅸ郭～第Ⅻ郭出土の遺物

土師器　皿（１１６）　口径１２．８cm、器高１．９cm、橙色。体部中央に段を持つ。

土師器　椀（１１７）　口径１２．０cm、器高４．０cm、灰白色。口縁部及び外面のハクリが激しい。外面には指圧痕が残る。

施釉陶器　皿（１１８）　口径８．８cm、器高２．４cm、淡緑色。灰釉。釉がガラス化し黄色になる部分もある。底部内面に陰刻花文を施す。

青磁　椀（１１９）　高台径５．８cm、緑青色。生地は淡灰色。

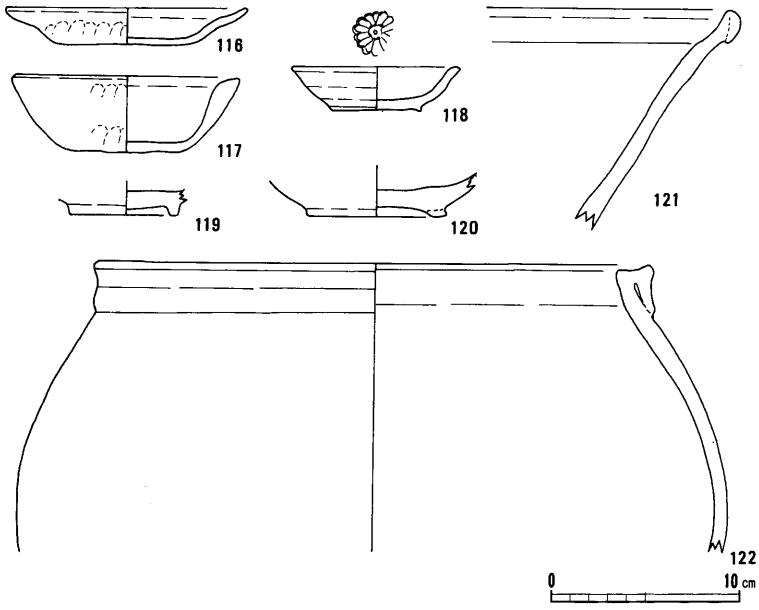
山茶碗（１２０）　高台径７．４cm、灰白色。高台にモミガラ痕が残る。

捏鉢（１２１）　口径不明、暗赤灰色。口縁部を折り返している。

甕（１２２）　口径２９．８cm、外面は灰白色、内面は赤灰色。常滑産と考えられる。

斜面などからの出土遺物

土師器　皿（１２４～１２６）　（１２４）は口径８．５cm、器高１．９cm、淡黄色。口縁部全体に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。（１２５）は口径９．８cm、器高１．９cm、淡褐色。（１２６）は口径１２．０cm、器



第20図　第Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物（１：４）

高２．０cm、淡黄橙色。

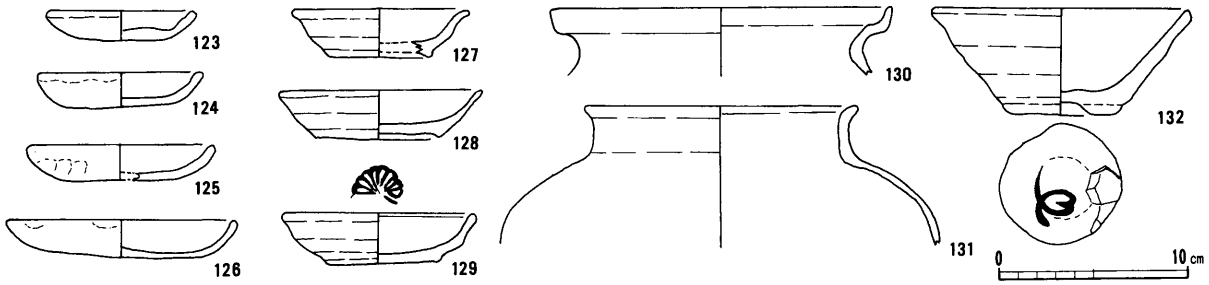
陶器　皿（１２３）　口径７．６cm、器高１．６cm、黒灰色。俗に山皿と呼ばれているものである。

施釉陶器（１２７～１２９）　（１２７）は口径９．４cm、器高２．５cm、黄緑色。（１２８）は口径１０．７cm、器高２．５cm、黄緑色。底部内面に陰刻花文を施す。（１２９）は口径１０．０cm、器高２．６cm、灰黄色。底部内面に陰刻花文を施す。いずれも瀬戸産と考えられる。

茶釜（１３１）　口径１４．４cm、橙色。全体に摩耗が激しく調整は不明瞭。

山茶椀（１３２）　口径１３．６cm、器高５．８cm、灰白色。高台が一部を残してハクリしている。ハクリした後に墨書されている。

土師器甕（１３０）　全体に摩耗が激しく調整は不明瞭。古墳時代のものと考えられる。



第21図　斜面からの出土遺物（１：40）

Ⅳ. まとめ

今回の調査は、道路改良事業にともなう調査であり、峯治城全体約２０，０００㎡の内、１／４を調査したにとどまり、かつ、中心部からやや東にずれた部分であった。しかし、四脚門や堀をはじめ、城郭の構造に関するいくつかの成果を得た。また、遺物は整理箱で４５箱出土したが、なかでも堀埋土より出土した遺物は、中勢地区における当該時期の貴重な資料になろう。最後に今回の成果を記し、まとめとしたい。

１．時期

城館成立以前では、古墳時代前期の土師器を伴う遺構が検出され、この時期に丘陵が何らかの形で利用されたことがわかる。

城館の成立時期については、出土遺物量が少なく、かつ包含層出土が大半であるため、現状では明瞭でない。包含層からは鎌倉時代後期頃に比定できる山茶椀が出土しているものの、城館に伴ったものかどうかは不明である。廃絶期は、堀から出土した遺物から室町時代末と考えられるが、埋土上層からは江戸時代初期頃の遺物も出土しており、堀が埋まりきるのはこの時期以降であろう。

２．郭構造

峯治城は標高２１．５ｍほどの第Ⅰ郭を主郭とし、その周りにいくつかの郭を配し、さらに、その周りに細長い平坦部を何段か設けるという郭配置がなされている。詳細は後述するが、北西方向からの導入路の防御的機能が高いことや、第Ⅰ郭の門が北に向いていることなどから、城館は北を強く意識して造られたと考えられる。またＳＡ２の、第Ⅲ郭への斜面がかなり緩やかであるが、本来はより急傾斜であったものか、あるいは更なる防御施設として堀などが存在する可能性も考えられる。

南側については、大正末の工場用地造成にともなう土取りにより破壊されており、不明であるが、おそらく東側の第Ⅷ郭と同規模程度の郭が存在したであろうと考えられる。

３．遺構

城館成立以前の遺構としては、ＳＫ７・２１がある。いずれも、古墳時代前期のものであり、その性格は今一つ不明であるが、丘陵斜面に立地している遺構として注意される。

峯治城においては、第Ⅰ郭が、主郭となる中心の郭であることは、調査前より明瞭であった。今回の調査区の制約上、第Ⅰ郭以外の郭についてはその性格を明確にすることは出来なかった。今回はすべての平坦地を便宜上郭として扱ったが、本来的には、いわゆる「郭」と、「腰郭」、さらに段や後世の開墾による削平面である可能性も考えられる。

このなかで、縄張り的に注目できるところは、下位の郭より第Ⅰ郭にいたる際の、防御機能を強く意識した導入路であろう。まず、第Ⅲ郭から第Ⅱ郭に至るには、屈曲した通路であるＳＸ１９を通る。ＳＸ１９の西側面には高さ０．８ｍ程度の、武者隠し的な小土塁があり、第Ⅲ郭への侵入者に対しての、いわゆる「横矢の構え」となっている。また、それとともに第Ⅲ郭からＳＸ１９への侵入者に対しては、主郭である第Ⅰ郭の土塁ＳＡ２からの防御行為が行われたであろう。

ＳＸ１９から第Ⅱ郭へ入るにも屈曲があり、調査時には今一つ明瞭ではなかったが、第Ⅱ郭西縁には若干の柱穴があり、あるいはこれらが柵としてまとまるものかもしれない。

第Ⅱ郭から第Ⅰ郭に至るには、大きな空堀ＳＤ４・５と、第Ⅰ郭にともなう土塁がある。この間にある土橋ＳＸ７を通り、門ＳＢ８を経て、第Ⅰ郭にはいる。現在、門ＳＢ８は若干第Ⅰ郭の内側に入ったところに位置するが、本来は門の前面にまで土塁があったのであろう。そうした場合、第Ⅱ郭から第Ⅰ郭に至る導入路（土橋ＳＸ７から門ＳＢ８まで）は、１０ｍ以上にもおよぶ、堀と土塁に挟まれた細長いものとなっており、この点でも防御性を高める要素の１つとなっている。

このように第Ⅲ郭から第Ⅰ郭へ至る経路は、複雑な屈曲や堅固な土塁などで防御性が高められているが、この城の存続時期である室町町時代末から江戸時代初期にかけて流行する手法である枡形は少なく

とも今回の調査範囲では認められなかった。

城館廃絶以後は、今回便宜上第Ⅶ郭とした平坦地が、その生活面である。遺構としては井戸などが認められた。

4．遺物

出土遺物は、大きく分けると、城館成立以前の遺物（古墳時代前期）と城館に伴う遺物、それに城館廃絶後の遺物に分かれる。今回は城館に伴う遺物について若干の問題点を指摘したい

堀ＳＤ４・５からは羽釜、鍋などが多く出土した。これらにはいずれも煤が付着しており、日常的に使用されていたことがわかり、峯治城が居館として機能していたことが窺える。

堀埋土からは、一石五輪塔が出土している。あるいは城館存続期に、城内のいずれかに置かれていたことも考えられよう。

最後に、注目できる遺物としては、白磁三耳壷と、瀬戸産の水滴がある。また、茶釜や瓦質風炉などもある。こうした遺物は城館主層が使用した蓋然性が高いが、今後他の城館出土遺物との比較検討をより詳細に進めていきたい。

註

（1）磯部　克編著『三重県地質図集』三重県高等学校理科教育研究会地学部会１９８７年

（2）稲本紀昭「伊勢国国人長野氏関係史料［上］」『三重大学教育学部研究紀要』第３５巻　１９８４年及び、小坂宜広氏、小林秀氏のご教示による。

（3）『上津部田城趾発掘調査報告』津市教育委員会１９８９年
『三重県埋蔵文化財年報１５』三重県教育委員会１９８５年

（4）奈良女子大学教授　村田修三氏のご教示による。

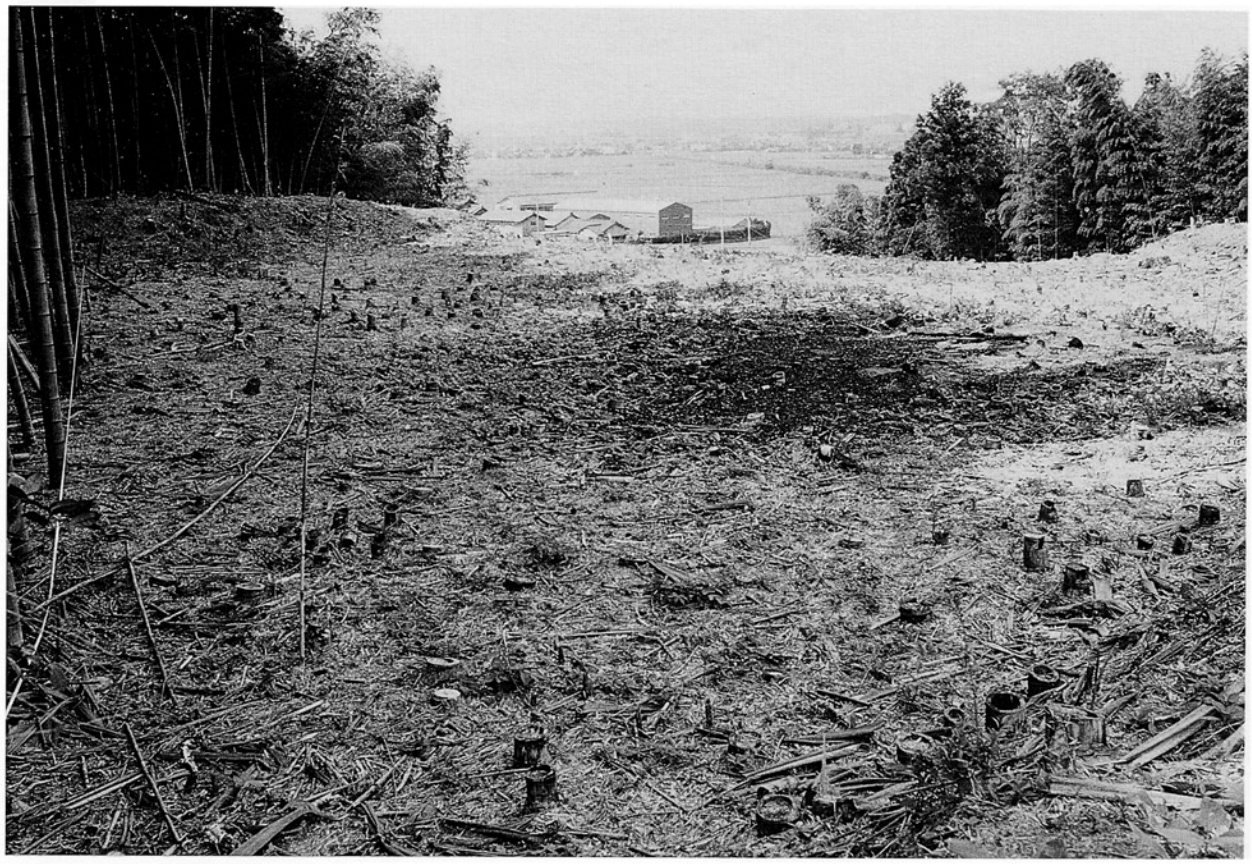
参考文献

瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　Ⅳ　１９８５年
瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　Ⅴ　１９８６年
伊藤裕偉「中世南伊勢の土師器に関する一試論」『Ｍｉｅｈｉｓｔｏｒｙ』１９９０年

PLATE

航空写真（北西から）

調査前全景（北西から）



第Ⅰ郭調査前全景（南東から）

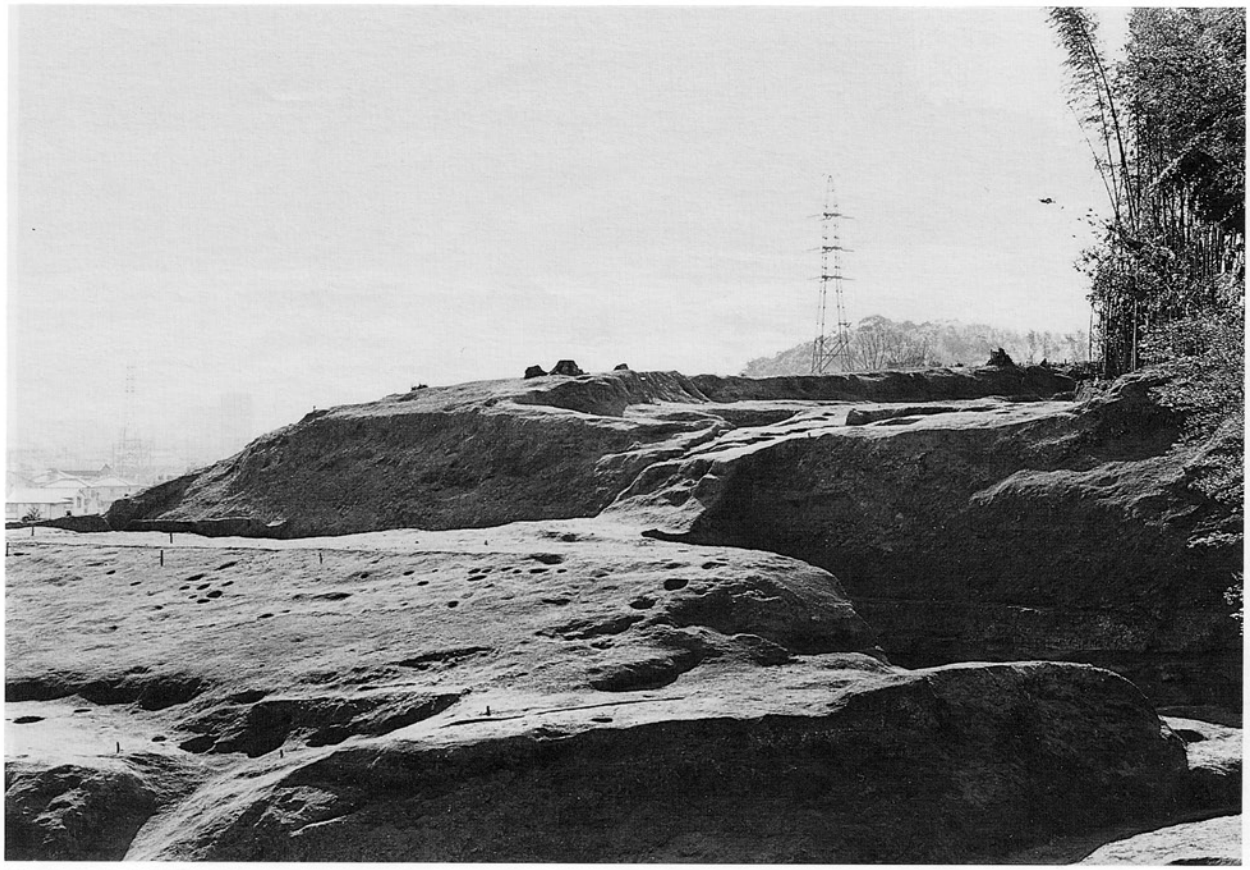
第Ⅷ郭調査前全景（北から）

調査前航空写真（南東から）

調査後航空写真（南東から）

調査後航空写真（北西から）

調査後全景（北西から）



第Ⅰ・Ⅱ郭（北西から）

第Ⅰ郭土塁ＳＡ1

第Ⅰ郭土橋ＳＸ７・門ＳＢ８

第Ⅰ郭門ＳＢ８

第Ⅰ郭不明遺構ＳＸ18

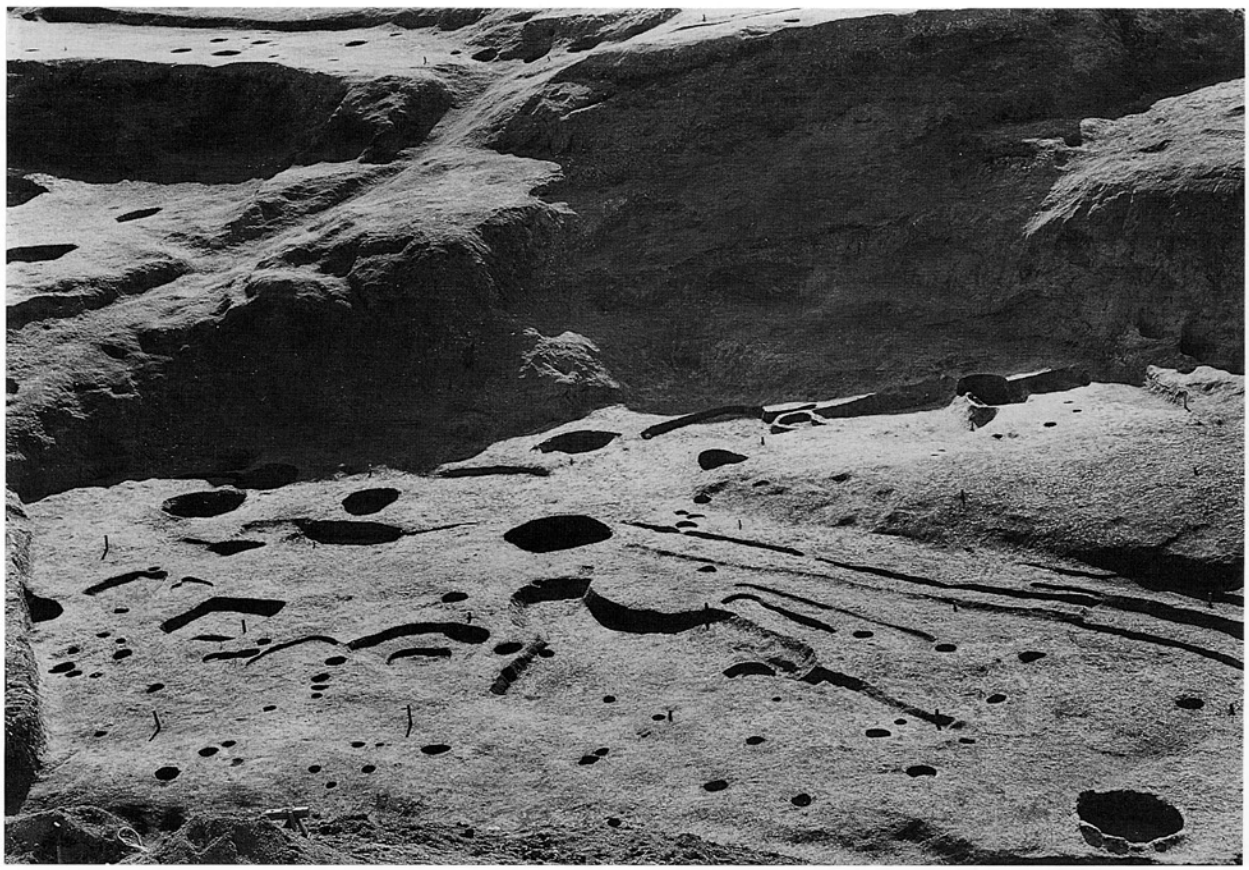
第Ⅰ郭堀ＳＤ4・土橋ＳＸ7・堀ＳＤ5

第Ⅰ郭堀ＳＤ4

第Ⅰ郭堀ＳＤ4土層断面

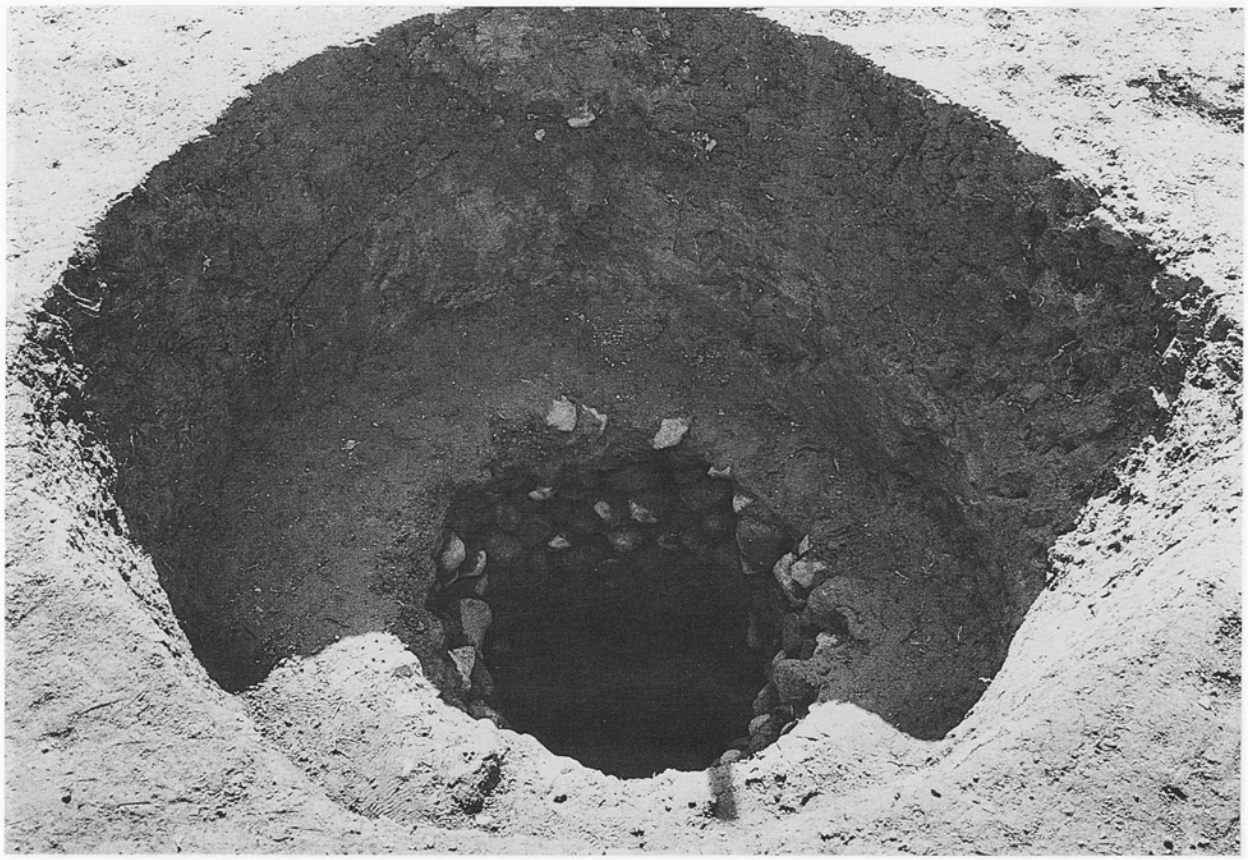
第Ⅱ郭導入路ＳＸ19

第Ⅱ郭ＳＢ26



第Ⅶ郭全景（北から）

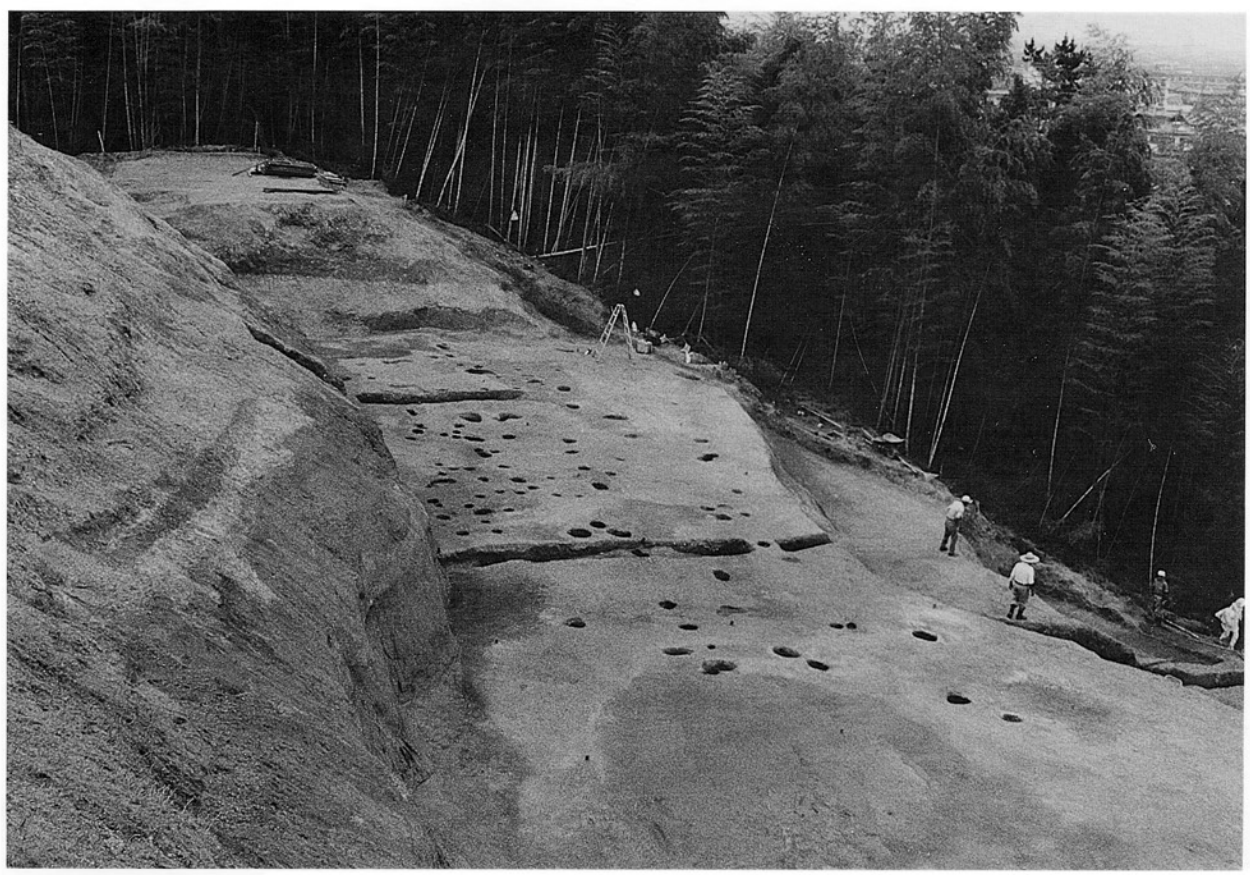
第Ⅶ郭ＳＫ31



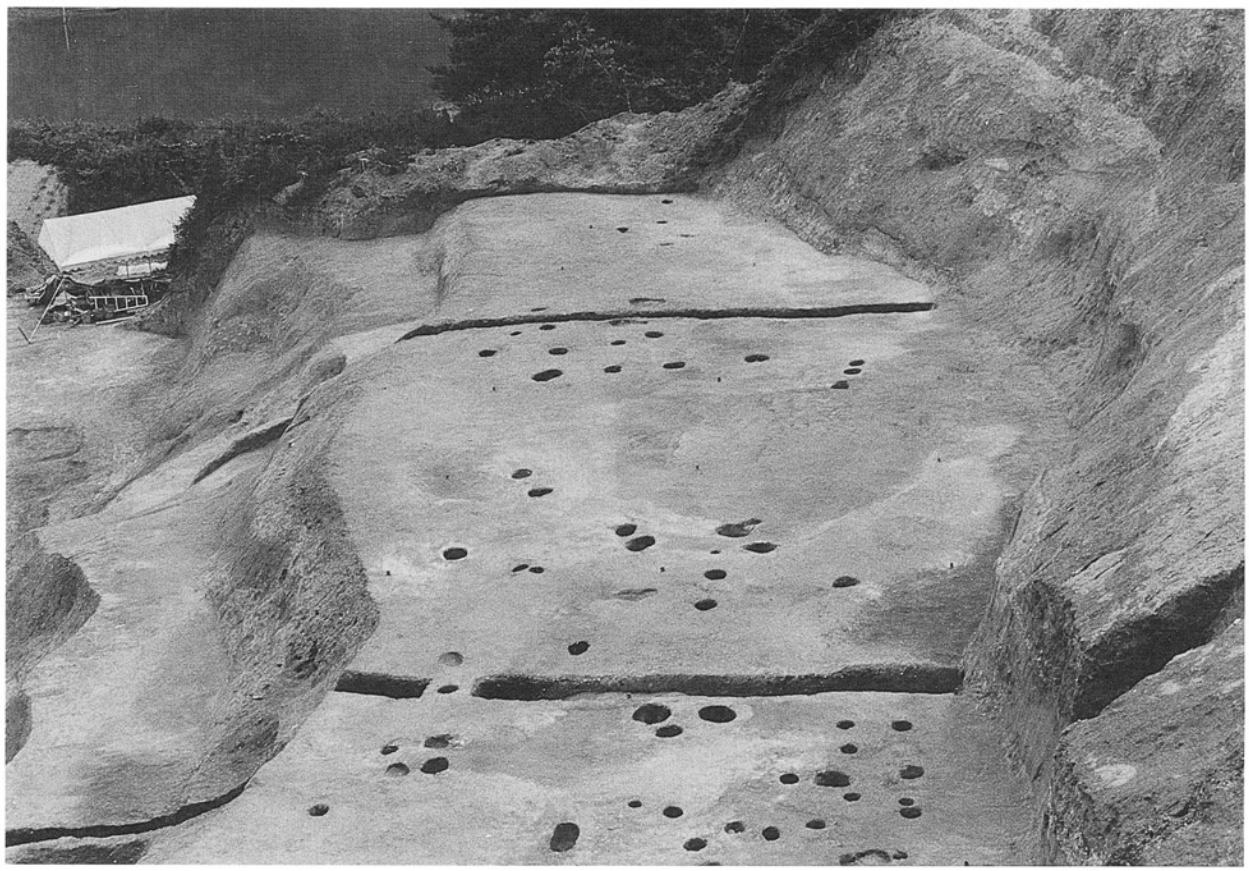
第Ⅶ郭井戸ＳＥ41

第Ⅶ郭井戸ＳＥ42

第Ⅷ～Ⅻ郭（南から）



第Ⅱ・Ⅷ郭（南西から）

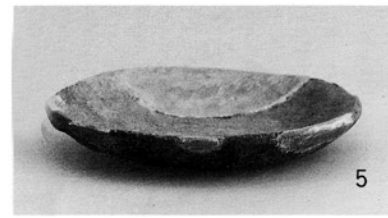


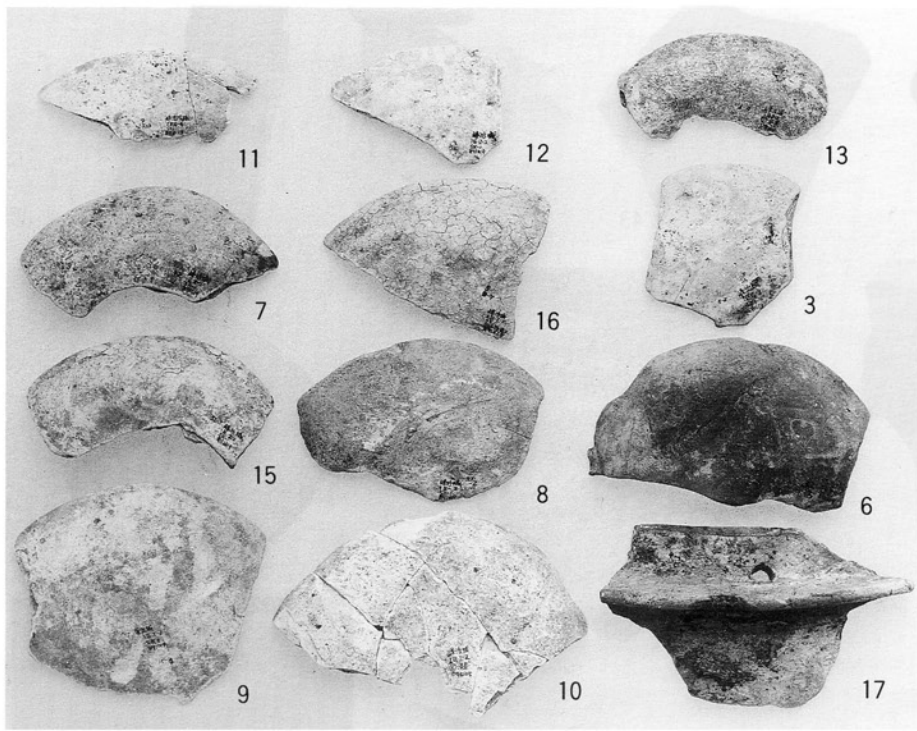
第Ⅷ郭全景（北から）

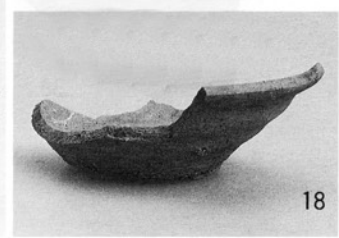
第Ⅸ～Ⅻ郭全景（北西から）

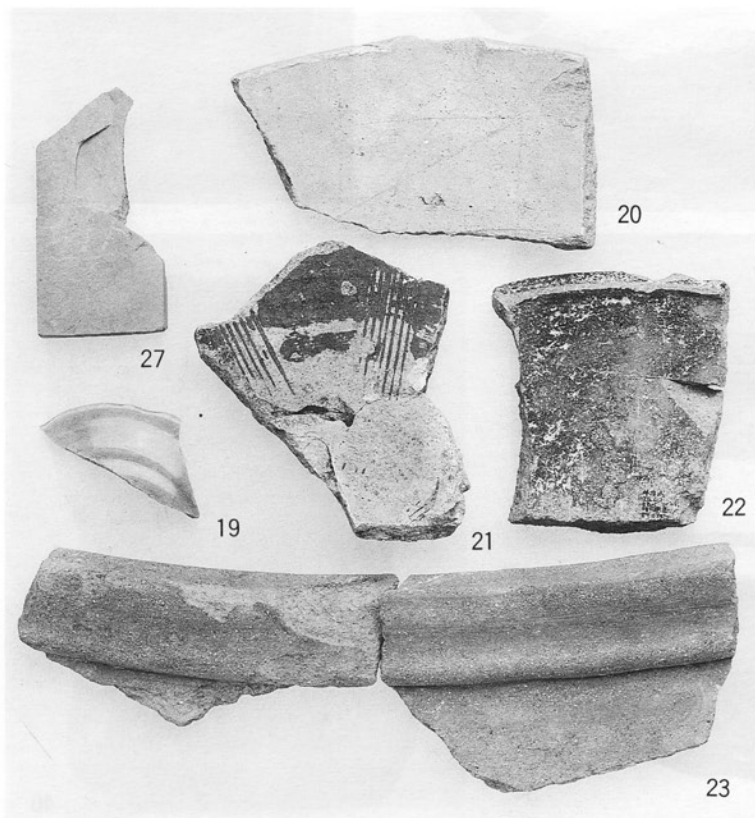
羽釜出土状況

天目茶椀出土状況

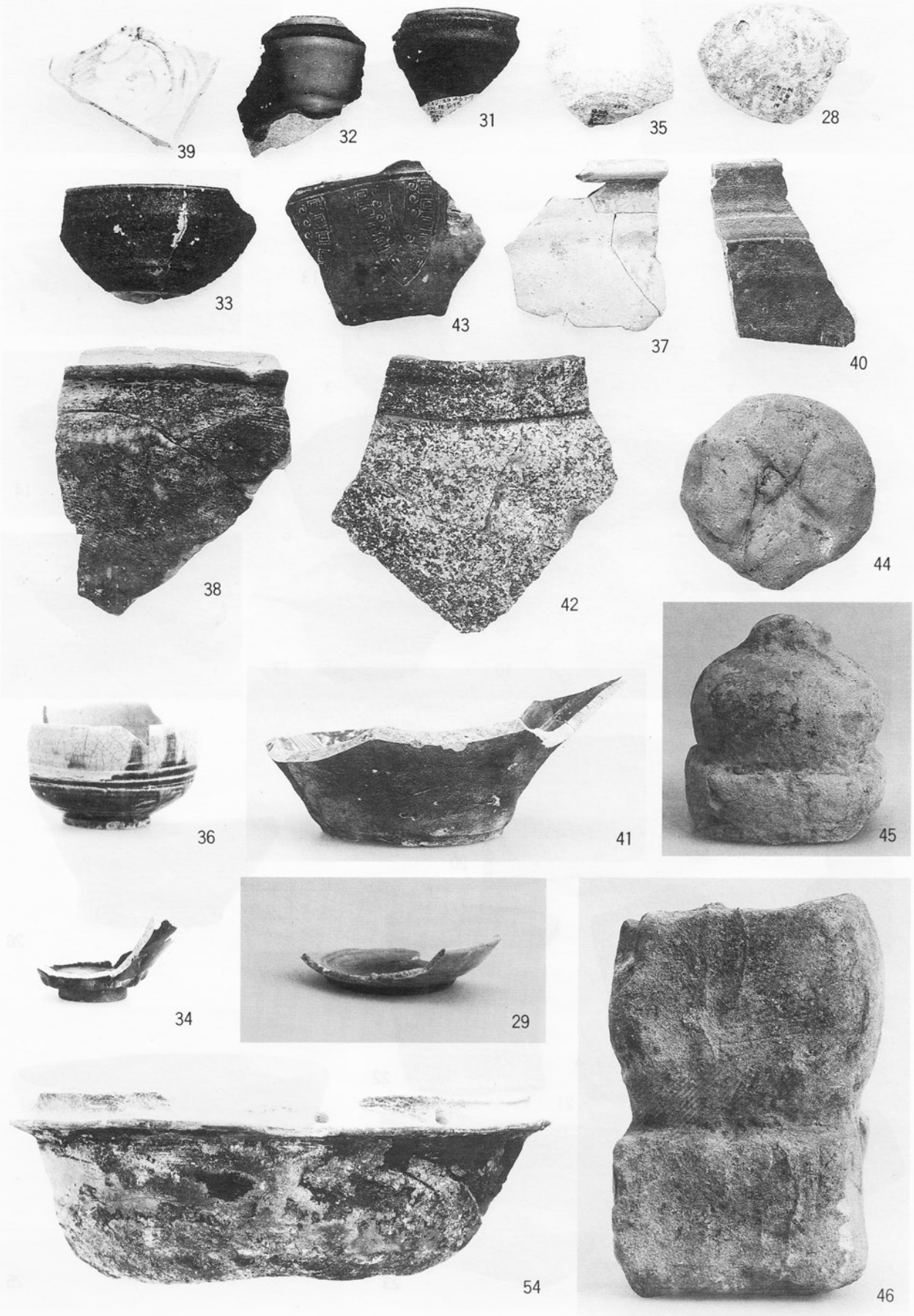




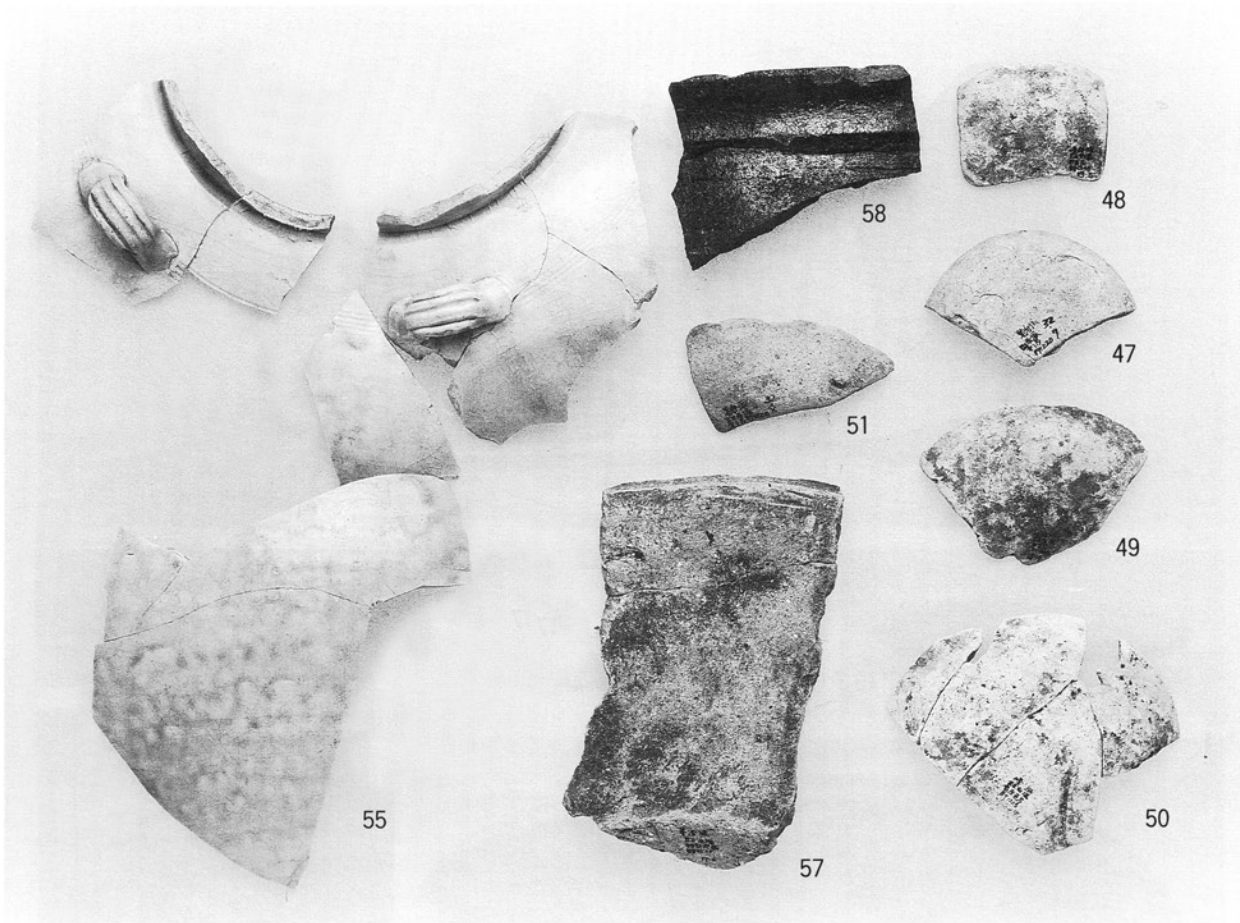




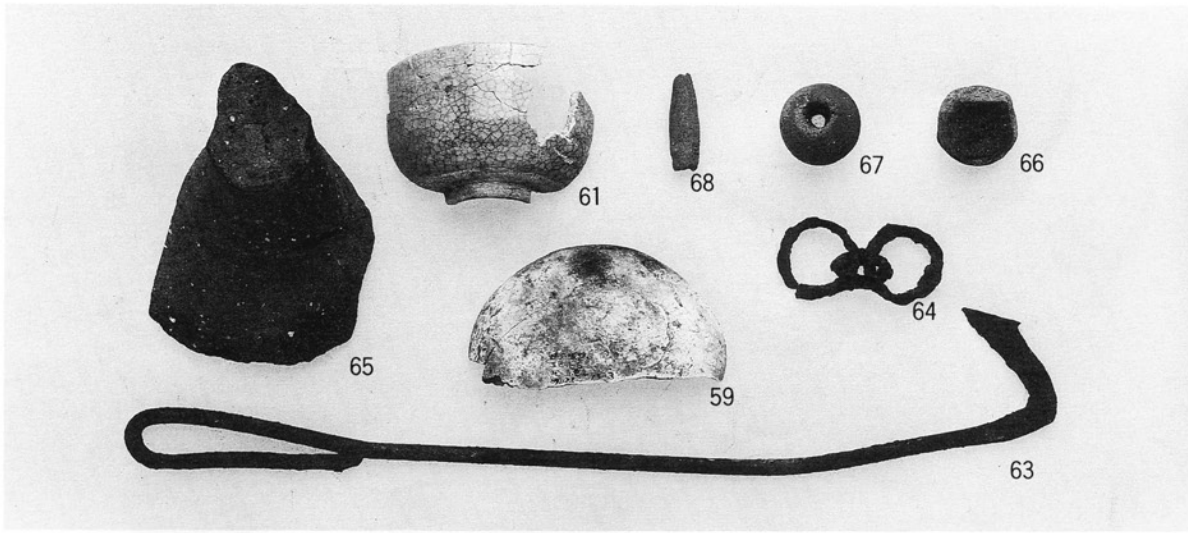
第Ⅰ郭出土遺物　1～23・25・26（1：3）

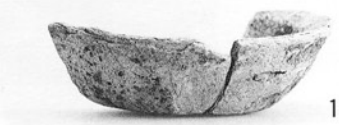


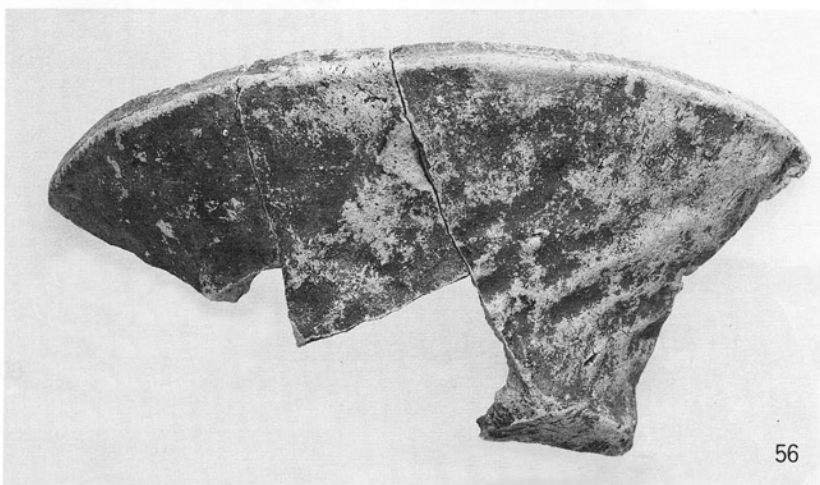
SD4出土遺物28・29、31～46、SD5出土遺物54（1：3）

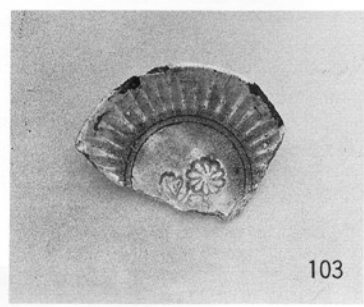


ＳＤ５出土遺物47～53・55・57・58、第Ⅱ郭出土遺物60、第Ⅶ郭出土遺物79～81（１：３）









SD５出土遺物56、第Ⅱ郭出土遺物61～68、第Ⅷ郭出土遺物101・103～105、第Ⅸ～Ⅻ郭遺物116・117（１：３）

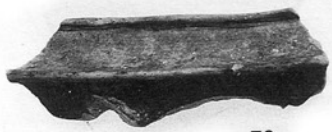
69

76

70

75

73


72

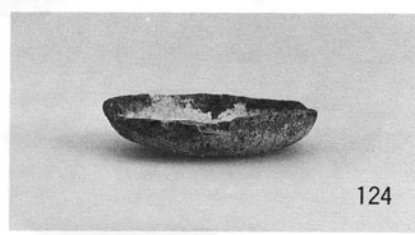
74

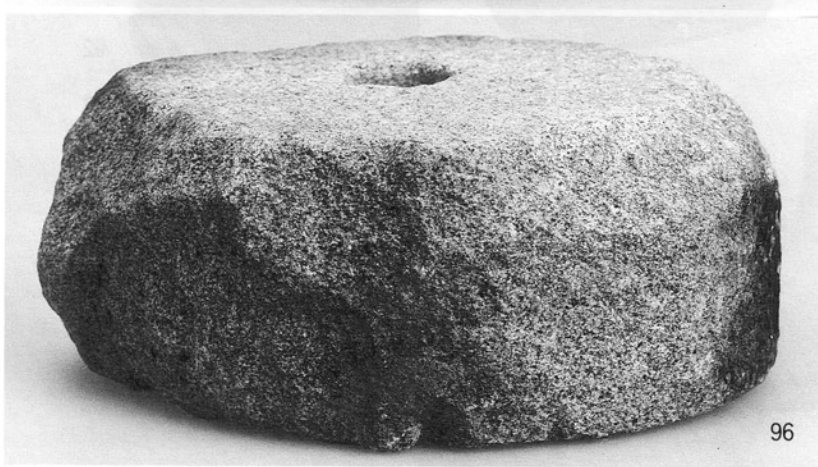
71

77

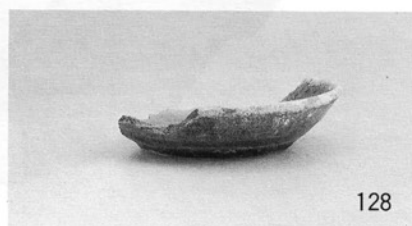
123

78

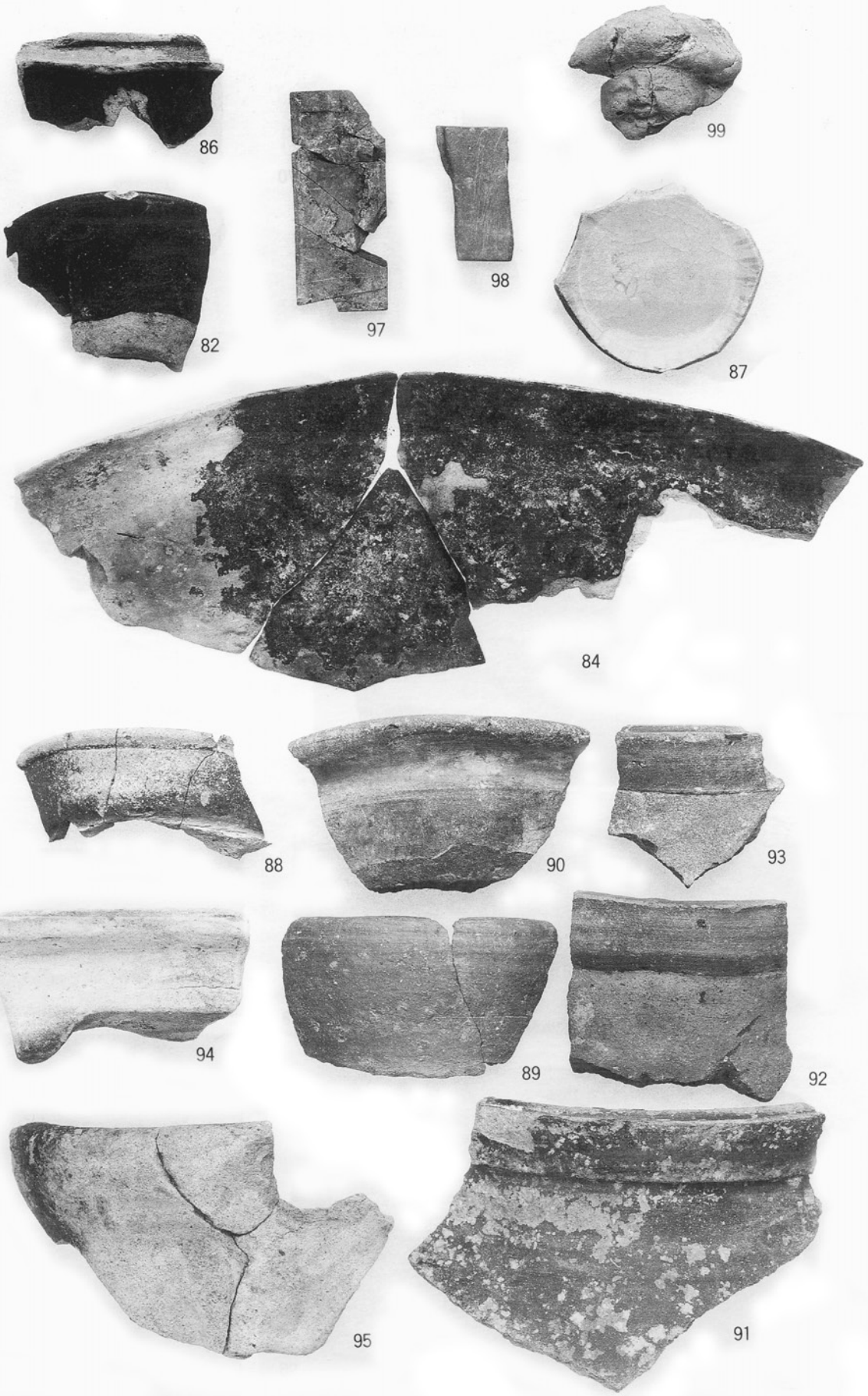

124


96

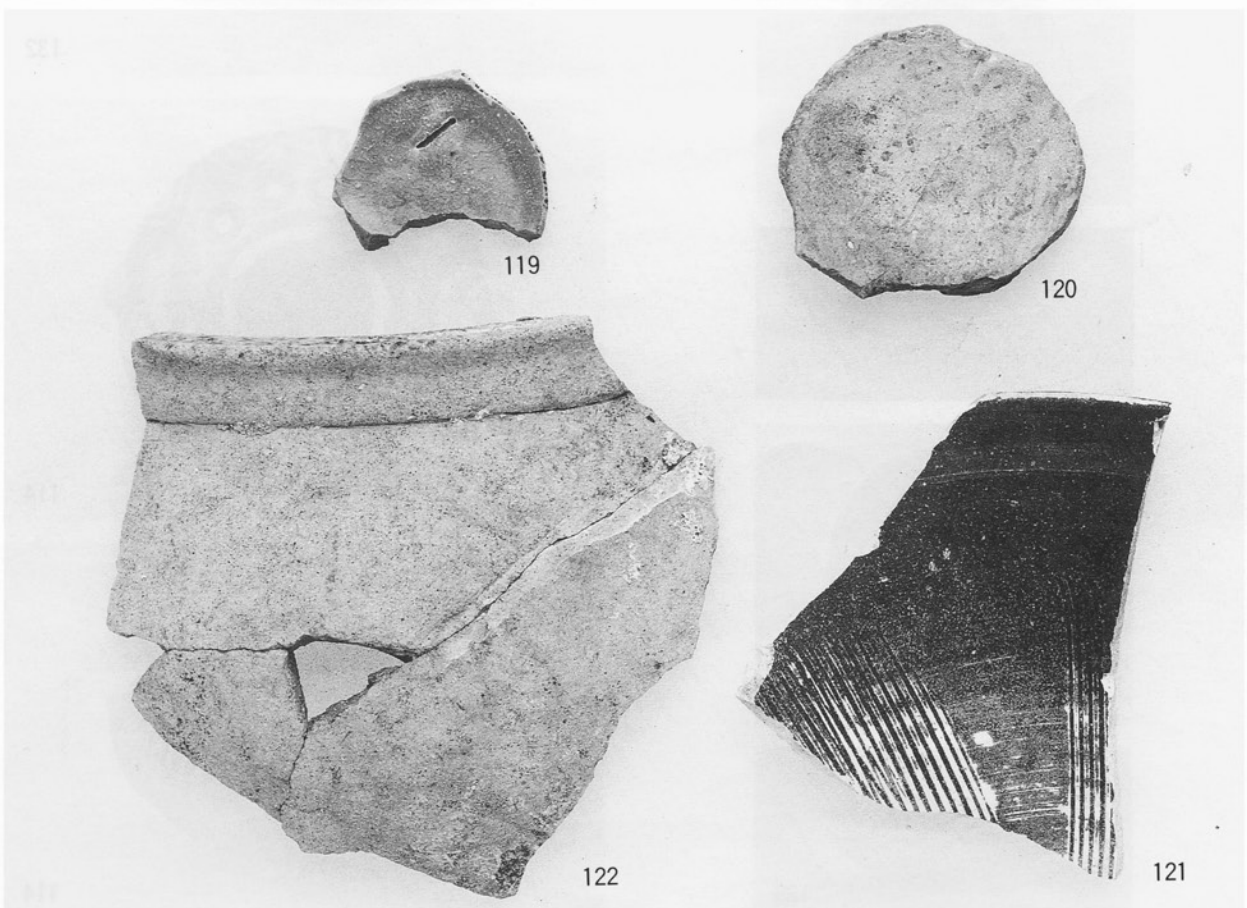
126


128

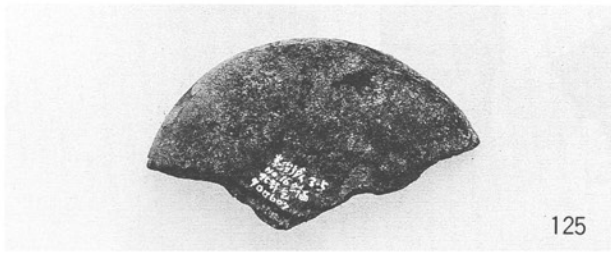
第Ⅲ～Ⅵ郭出土遺物69～78、第Ⅶ郭出土遺物96、第Ⅷ～Ⅻ斜面出土遺物123・124・126・128（1：3）



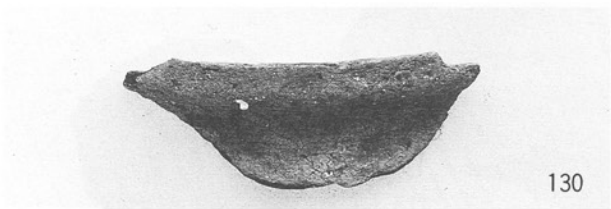
第Ⅶ郭出土遺物82・84・86・87～95・97～99（1：3）

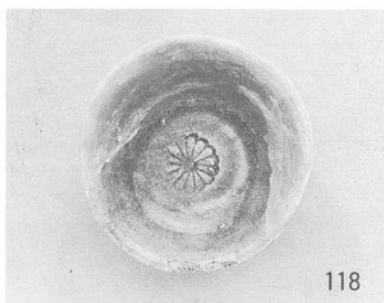


第Ⅷ郭出土遺物100・102・103・106～113・115、第Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物119～122（1：3）

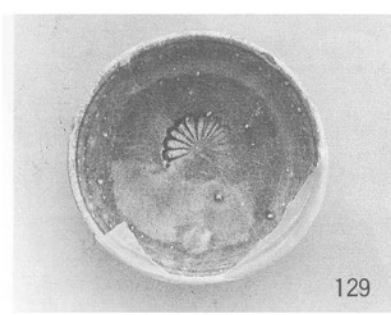

125

127


130


118

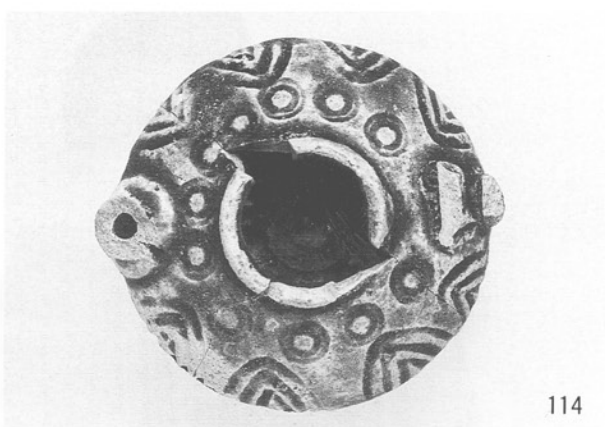
118


129

129

131

132


114

114

第Ⅷ郭出土遺物114、第Ⅸ～Ⅻ郭出土遺物118、第Ⅷ～Ⅻ郭斜面出土遺物125・127・129～132（1：3、但し114は1：1）

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告95

都市計画道豊里・久居線道路改良工事に伴う

峯治城跡発掘調査報告

1991年3月

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター
(三重県多気郡明和町竹川503番地)

印　刷　光出版印刷株式会社